ソードアートオンライン　刀使いの少年

リスボーン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エクストラスキル・カタナはβテスト版では入手不明と思われていた。

だが実はすでにβテスト版で入手していたプレイヤーが存在しており、彼は後に正式版「ソードアートオンライン」にて最強の刀使いとまで謳われることとなる。

注意　このタイトルはとりあえずのものなので変更するかもしれません

目次

アインクラッド編
プロローグ ―― 1
仮想世界 ―― 4
デスゲームの初日　前編 ―― 16
デスゲームの初日　中編 ―― 26
デスゲームの初日　後編 ―― 44
デスゲームの初日　クライマックス
55
暗闇に光る流れ星 ―― 73
情報屋アルゴ ―― 84
第一層攻略会議 ―― 104
攻略戦の前夜 ―― 118
栄光と死のロード ―― 139
獣人の王 ―― 154
星に願いを ―― 168
攻略の代償 ―― 185

アインクラッド編
プロローグ

２０２２年１１月６日　１２時５５分

「あと５分、５分で１３時……」

自分の部屋で右と左を行ったり来たりしながら、まるで呪いの呪文でも唱えているかのようにパソコンのデジタルタイマーを見ながらつぶやく。

この動作をあれこれ２時間は続けているだろう。

なぜ俺が１３時をこれほどまでに心待ちにしているかと言うと、実は１３時からあるオンラインゲームの正式サービス開始日だからである。

「なんだ、たかがゲームか」と普通の人なら思うかもしれないが、このゲームはそんじゃそこらのゲームとはわけが違う。

全国のゲーマー達を魅了し、発売日にはわずか限定１万本のソフトを買うために３日かけて店頭に並んでいた者もいるほどのゲーム。

そのゲームの名は《ソードアートオンライン》略称《ＳＡＯ》である。
このゲームは《ナーヴギア》と言うヘルメット型の機会をかぶり、意識を仮想空間へと飛ばして、あらかじめに作ってあるアバターを信号パルスで操作する。
簡単に説明するとすれば、ゲームの世界に入り込めるとでも言えばいいだろう。
この今までにないゲームシステムに全世界のゲーマー達は、発売を心待ちにしていた。
まあ、俺を含めた約１０００人のプレイヤーはβテストと言う体験版のようなものをプレイしているのだが。
「……そろそろだな」
デジタルタイマーが１２時５９分になり、俺は《ナーヴギア》を頭に装着し、ベッドに横になる
恐らくあと数十秒のうちに１３時となり、正式サービスが開始するだろう。
「（また、ＳＡＯをプレイできるんだな）」
にやり、と思わずにやけてしまう。
現実《リアル》から仮想空間《ゲーム》行くための合言葉を。
俺が。
坂井真司が別なシンジになるために

「リンクスタート!!」

仮想世界

第1層フロア・西フィールド

「オラァッ!!」

掛け声とともに振り下ろされた剣が青いイノシシ《フレンジーボア》に命中し、ＨＰバーを０にした。

途端に《フレンジーボア》は断末魔をあげ、光の小さな欠片となり周囲に拡散し、俺の目の前に紫色のフォントで加算経験値の表示が浮かび上がる。

βテスター時代に飽きるほど見たこの表示も、久しぶりに見るととても懐かしく感じられる。

「……本当に、帰ってきたんだな」

ボソリとつぶやく。

このゲーム《ソードアートオンライン》略称《ＳＡＯ》は、『ナーヴギア』というヘルメット型の機械を被り、意識を仮想空間にとばし電磁パルスでアバターを操る。分かりやすく言えばゲームの世界に入り、自らがプレイをするような感じだ。

今までのゲームとは圧倒的に違うこのゲームは、発売前から知らない人はいないと言われるまでになり実際に予約は即終了、ゲーム店にも長蛇の列が発売３日前からできたほどの人気っぷり。

俺はβテスターと言う稼動試験参加者に選ばれており、その特典の正式版パッケージの優先購入権がプレゼントされ、楽にこのゲームを手に入れられたが、もしβテスターに選ばれてなかったら間違いなくここにはいなかっただろう。

ログインする前、《ＳＡＯ》を買いに行っていた数人の友達とボイスチャットで話しを聞くと、まさに戦場だったたと語っている。

結局その数人の友達で買えたのは一人しかいなかったのだが、そいつも今日は「やら

ないと」といっていた。
一体ゲーム店で何がおこったのか想像するだけで恐ろしい。

「っと、もうこんな時間か」
ふと空を見ると、もうだいぶ日が落ちてきていた。
「そろそろ帰らないと母さんや妹にどやされんな」
ちょうどここ等のモンスターは全て狩り尽くし、しばらくはし出現(POP)しない。
「(腹も減ったし、そろそろ一度ログアウトするか。)」
人差し指と中指をまっすぐにあげ、振り下ろす。
すると俺の目の前に《メニュー・ウィンドウ》が出現した。

コントローラのないこのゲームでは、こういったアクションなどでメニューを開く。

当時βテスターだった頃の俺は、チュートリアルをすっ飛ばしてゲームを始めたため、《メニュー・ウィンドウ》の開き方が分からず、半日間ログアウトできなかった。

そんな苦い記憶を思い出しながら、メニューの一番下にあるログアウトボタンを押そうとした

時だった。

俺の指が途中で止まった。

いや、止まったというより止めるしかなかった。

なぜならそこに押すべきものがないのだから。

このゲームにはなければいけない、絶対がつくほどの物が……

「……馬鹿な、そんな訳あるか!!」

自分に言い聞かせるように怒鳴り、今度は上から順に探す。

が、やはりどこにも見当たらない。
だったら、ＧＭコールならどうだと、コールしてみるが反応はない。

「どうなってんだ……」

空を見ながらつぶやく。
俺の知っている限りログアウトする手はもうない。
……いや、よく考えたらあった。
現実（リアル）で、《ナーヴギア》を外してもらえばいい。
それなら万事解決で、この事態は収まる。
幸い、もうすぐ俺の家では夕食の時間だ。
あと数分もしたら妹が呼びに来てくれるだろう。
そしてまだゲームの中に居る俺に加減しらずの数発の拳をくらわせ、『ナーヴギア』を外して
くれるはずだ!!
……ただじゃ済まないな。
ま、まあ、別に焦っても変わらないし、とりあえず《始まりの町》に戻るか。

俺が歩き始めようとした時だった。

リンゴーン、リンゴーン

突如、不気味な鐘の音がこの世界に鳴り響いた。
なにかこれから起きると暗示させるように。
直後、俺の体が青色の光に包まれる。
この現象はベータテスター時に何度も見た。
結晶系アイテム《転移結晶》による《転移》（テレポート）。
だが、生憎俺はそんな物使ってないし、第一にこの層で入手は不可能のはずだ。
運営側の強制転送にしても、アナウンスがないのが引っかかる。

「一体この世界（ゲーム）で、何が起こってるんだ？」

その言葉を最後に俺の視界は完全に光に包まれる……

光が晴れると、俺は《始まりの町》にいた。
いや、俺だけではない。
俺の他にも、続々とプレイヤーが《転移》してきている。
ざっと見ただけでもその数は５０００人は軽く越していた。
恐らくこの街に全プレイヤーを集めているのだろう。
《転移》してきたプレイヤーは皆各々に不満を叫んでいた。

「どうなってんだ」「早く出せ!!」「さっさと説明しろ」「私、怖い……」「大丈夫だよ、僕が守るから」

……最後の方の奴らはくたばれ。

「あ……上を見ろ!!」

誰かが言い出したその言葉に俺以外のプレイヤー全員が上を向く。
俺も少し遅れて上を向くと、空の一部分だけが血のように赤くなっている。
しばらくすると、その血のような赤はすごいスピードで空を覆い、一分足らずで空を

赤く染め上げた。
さらに赤い空の中心から赤いどろりとした雫が垂れ落ち、姿を人型に変え、広場中央に降臨した。
恐らく運営のＧＭマスターのアバターだろう。
そしてそいつはここに居る全プレイヤーに低く、落ち着いた声で言葉を発する。

「ようこそ、私の世界へ」

その後こいつは、色々な事を説明した。
自分はこのゲームの開発者の茅場晶彦であること。
ログアウトできないのは、仕様であること。
もし外部からの解除を試みた場合、脳を焼かれること。（これについては、既に犠牲者がでて居るらしく、テレビで注意を促しているため、問題はない）

第百層のボスを倒すまでここから出れないこと。
そして、この世界での死は本当の死を意味すること。
馬鹿らしい。
こんなことはでたらめだ。
周りのプレイヤーは、皆こういうが、内心では恐怖を感じている。

「それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実あるという証拠をみせよう。諸君のア
イテムストレージ、私からのプレゼントが用意されている。確認してくれたまえ」

それを聞き、俺は右手の指二本を真下に向けて降る。
出現したメニューから、アイテム欄のタブを押し、表示された一番上のアイテムを見る。
アイテム名は、手鏡。
意味が分からなかったが、とりあえずオブジェクト化させ、手に取った。
覗き込んで見えるのは、俺の自信作のイケメンアバター。
自分でも上手くできたと改めて思いながら、同時にこのアイテムの意味が分からない

ことに、不安を感じた。
しかしすぐに理解できた。
鏡が急に白い光を放出し、体を包む。
ほんの2、3秒間視界がホワイトアウトし、すぐに元の風景に……いや、違う。
世界も建物も変わってはいない。
ただ、ひとつだけ変わっているものがある。
俺はすぐに手鏡を下に放り投げて、周りを見る。
今までいた、プレイヤーの顔がほぼ全員変わっている。
俺にはすぐ分かった。
あのアイテムは、現実の自分の姿をアバター化するアイテムだと。

「……以上で《ソードアートオンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤーの諸君――――検討を祈る」

最後の言葉を機に、あのアバターは消え、この町も本来の姿を取り戻した。

だが、約一万人のプレイヤーは違った。
ほぼ一斉に、様々な感情を込めた叫びが、大ボリュームでこの世界に響き渡る。
怒り、嘆き、苦しみ等が叫び声とともに伝わってくる。
俺はその叫び声に耐えられず、両手で耳を抑えながらこの広場から逃げるように去った。

複数あるうちの街路に入りようやく叫び声が聞こえないところまで来た。
俺は静かに壁に腰を掛けて、崩れるように座る。
「(ここから出るには１００層まで攻略するしかない、か)」
ベータテスターの時も、ろくに攻略できなかったのに、果たしてそんなことが可能なのか？
だったらここで助けを無難に待つべきなんじゃないのか？
様々な不安が俺を襲う。

考えても、考えても不安しかない。

「ここに居てもしょうがないか……」

俺は静かに立ち上がり、両手で自分の両ほほを叩く。

せめてこの世界でできることだけはやろう――――そう思いながら。

「そうと決まればまずは、資金集めだ」

メニューを開き、そこからマップを表示する。

目標場所は《ホルンカの村》

「そんじゃ、行くか」

俺は西門の方角にゆっくりと歩いて行った

デスゲームの初日　前編

第1層フロア・ホルンカの村

「これと、これを頼む」
「毎度有り」

ＮＰＣに買ったアイテム分の金貨《コル》を渡し、店を出た俺は、村の奥の方へと足を進める。
俺は今、《始まりの町》から北西に行った方角に位置する《ホルンカ》と言う村に来ていた。
俺が数時間前にいた《始まりの町》より規模は小さいが、ここには必要最低限の設備が整えられており、周囲の森にもそれほど強いモンスターは出ないので、狩りの拠点にするには十分な場所だ。
おまけに俺が来た時には他のプレイヤーは見当たらなかったので、ＰＫ《プレイヤー・

キル》をくらう心配もない。
……いや、ＰＫは考え過ぎか。
デスゲームと化した《ＳＡＯ》では、流石に誰もＰＫはやらないはずだ。
なぜならそれは、現実のプレイヤー自身を殺すのと同じことなのだから。

「っと、ここだな」

一件の民家の前で足を止め、扉を開けて中に入る。

「こんばんは、旅の剣士さん。お疲れでしょう、食事を差し上げたいけれど、今は何もないの。出せるのは、一杯のお水くらいのもの」

意味がないと知りながら、俺はひと呼吸し、しっかりとした発音で答える。

「それでお願いします」

ＮＰＣは、俺の目の前のテーブルに水の入ったコップを置き、少し微笑んだ表情で火

のかけてある鍋の元に行く。
俺は立ったまま水の入ったコップを手に取り、水を一気に飲んだ。
それから数秒待っていると、奥の部屋から子供の咳き込む声が聞こえてきた。
その声を聞くと先ほど俺に水をくれたＮＰＣは大きく、肩を落とす。
それからさらに数十秒後、ＮＰＣの頭上に金色のクエスチョンマークが点滅した。
クエスト発生の証だ。
俺はもう一度息を吸い込み、ＮＰＣに向かって声を発する。

「何かお困りで？」

――――――娘が重病にかかってしまい、それを治すには《リトルペネント》からごく稀にドロップされる胚
珠が必要で、それを取ってきてくれたら先祖から伝わる長剣を差し上げます。

以上が俺がたった今受けた《森の秘薬》クエの内容である。
報酬はクエの内容どうり、長剣――――――《アニールブレイド》という武器だ。
この武器は《片手用直剣》に分類されるため、《片手用曲刀》を扱う俺には入手しても

宝の持ち腐れなのだが、使い道は他にもある。
《アニールブレイド》序盤で手に入る《片手用直剣》系の中で一番レア度が高く、性能も第3層まで使えるほどだ。
それ故に売却価格も高く、結構な金になる。
今回この村に来たのもそれが理由で、ここで十分な資金とレベルを上げて体制を立てるために来たわけだ。
それにもしかしたらあいつもここに来るかもしれないからな。
脳裏にキザったらしい顔で、黒い前髪が垂れ下がった少年のアバターが浮かぶ。
βテスター時代に初めて友達《ライバル》になったプレイヤーの……
「俺は先に行ってるぜ、キリト」
ボソリとつぶやき、俺は森の方へと走っていった。

βテスター時代に発見した《リトルペネント》が大量に湧出《ＰＯＰ》する場所にたどり着いた俺は、早速ソロの必須スキルの一つである《索敵》をセットした。
このスキルの効果は反応距離を増加させ、視認ができなくても敵の位置が分かるという優れものだ。
試しにあたりを見回すと、小さくカラー・カーソルが出現した。
カーソルの色は少し濃い目の赤。
赤色はモンスターを示しており、強さは色の濃さで大体わかるようになっている。
普通の赤色が同等の強さを表しており、濃ければ濃いほど俺よりも強く、薄ければ薄いほど俺より弱いといった感じである。
今回の場合は少し薄い赤なので、俺より少しだけ強いといった感じだろう。
このモンスターの名前は《リトルペネント》レベル３。
リトルとつくくせに、身の丈が１メートルもあるうつぼ型のきもい捕食植物だ。
俺は他のモンスターが居ないことを確認し、《リトルペネント》の方へと走っていった。
ようやく視認できるところまで来ると剣を鞘から抜き、さらに距離を詰める。
「（花なし。ハズレだな）」

よく確認をし、さらに走るスピードを上げる。
そして切りつけられる距離までに達した瞬間《リトルペネント》に先制の一撃を喰らわす。
俺の斬撃を受けたネペントは、悲鳴のような声を上げて俺の方を向いたが、もう遅い。
横薙に相手を切る片手用曲刀基本スキルの一つである《スラッシュ》の発動準備は出来ていた。
剣先が薄い赤で満たされると同時に、こちらを向いたネペントの弱点部分である茎の接合部分に容赦なく叩き込む。
これで終わりだ――――と、思ったがギリギリのところでネペントのＨＰが残り、ツタにより攻撃を仕掛けてきた。
しかし一瞬早く気づいた俺は、そこから飛び退いて間一髪かわす。

「あぶねぇな……」

一瞬の油断が、身を滅ぼす。
そのことを立った今体感した俺は、この世界で二度と油断しないことを心の中で誓

い、ネペントに止めを刺す。
ホット、ため息を漏らしたあとに出現した加算表示にに目を向ける。
戦闘時間は５０秒。
油断したのが主な原因だが、それを差し引いてもこのタイムは流石に遅い。
次はせめて３０秒ぐらいまでには縮めなければ。
再び周りを見回して、次の獲物を探し出すと、そこに向かって歩いていく。

あれから一時間近く経ったが、未だに花つきは現れない。
倒した数も恐らく１００以上は行っているはずだ。
レベルもいつの間にか５になっている。
だが、出ない。
確か花付きの出現％は１にも満たないとどこかで聞いたが、普通のネペントでも倒し続ければ出現率が上がる。
故にそろそろ出てもおかしくないんだが……

「(そろそろ武器の耐久率もポーション残量もやばいし、もったいないが一度帰るか)」

剣を鞘に収めようとした時だった。

視界にアイコンがうつり、俺の後ろの割と近くに反応が出ていた。

振り向くとそこには――――

待ちわびていた花つきのペネントが出現していた。

俺は思わず息を飲んだ。

間違いではないのかと、目を凝らしてよく見た。

だが見間違えなどではない。

確かに目の前にいるのは花つきだ。

俺は嬉しさのあまり震えている手を静止させ、花つきのペネントに剣を構える。

それに気づいた花つきペネントは、「シャァァァァァ」と雄叫びを上げ、こちらに向かっていく。

だが、俺はそんなのお構いなしにモーションを起こす。

刃がオレンジ色に輝き、それと同時に左足で地面を蹴る。

オレンジ色に輝く刃は、真っ直ぐに花つきペネントに向かい、命中した。

《スラッシュ》と同じ片手用曲刀基本スキル《リーバー》だ。

花つきネペントは《リーバー》を喰らうと、ＨＰバーが０となって光の欠片になり、そして消えた。
そして俺の足元に拳大の胚珠が転がってきた。
俺はそれを拾い、メニューを開きアイテム欄に格納した。
目標達成だ。
嬉しさを噛み締めながら、剣を鞘に収め、村に戻ろうと再び後ろを向いた時――

――

「……おいおい、冗談だろ？」

先ほどと同じように手が震える。
だが、先ほどとは震えていた理由が違う。
なぜなら今度の震えは喜びではなく、恐怖なのだから。
俺の目の前に大量に出現しているモンスターを表すアイコン。
そしてほのかに臭うこの匂いは……
いや、今は考えてる場合じゃない。
剣を再び鞘からだし、戦闘態勢をとる。

「かかってこい!!」

そう叫びながら、俺はモンスターの群れに走っていく。

デスゲームの初日　中編

「シュウウウー」

数体のネペントが俺の方へと向かってくる。

「邪魔だ!!」

俺は素早くソードスキル《スラッシュ》を発動させ、俺の方に向かってきた数体のネペントを葬る。

その後大量の光のかけらが飛び散り、俺の目の前にドロップされたアイテムの名前や加算された経験値が

表示されたが、それ等を見ずにその場を走り抜ける。

しばらく走ると敵モンスターを示すカーソルが２つ出現する。

「クソ、どこに逃げてもネペントだらけかよ」

吐き出すように文句を言う。
今、この場所一帯にはネペントが大量に集まってきている。
理由は大体察しがつく。
恐らく俺の後に来たプレイヤーが《実》をつけたネペントを攻撃したのだろう。
実付きのペネントの出現確率は花付き並に低く、それほど強くもない。
ドロップするアイテムも通常のと変わらない。
実がついている以外はなにも変わらない普通のネペント――
だとは思ってはいけない。
実付きのネペントについている《実》を攻撃すると、その瞬間甘ったるい匂いが周囲に拡散する。
そしてその匂いは広範囲から大量のネペントを呼び寄せる。
そうなってしまえば後は囲まれてペネントからの集中砲火を受けることとなる。
いくら俺がペネントよりもレベルが上だと言っても、これはさすがにヤバイ。
おまけに武器の耐久値も半分きっているという始末。
もし、こんな状況で武器が壊れでもすれば――
よそう。

これ以上考えたら精神の方が先に限界がきそうだ。
とにかく今は数の少ないところを通りながら、なるべく戦闘を避けるしかない。
武器を強く握りしめてスピードを上げる。
そのまま2匹のペネントのタゲを取り、片方にスピードをプラスした斬撃を弱点に叩き込む。
攻撃を受けたペネントは光の欠片となり爆散する。
同時にもう片方のペネントは溶解液を吐き出すモーションを取っていた。
この溶解液を浴びると武器や防具の耐久値が大幅に減り、動きもしばらく阻害されてしまう。
しかも広範囲で、後ろに逃げても無駄だというおまけ付きだ。
今の俺がこいつを喰らえば、ほぼ積んだと言っても過言じゃないだろう。
だが、当然俺はこの攻撃の回避方法をマスターしている。
ペネントが溶解液を吐き出そうとする瞬間に、態勢を最大まで低くして突っ込む。
吐き出された溶解液は、俺の頭上ギリギリの所を通過して5メートル先の木に命中した。
俺は突っ込んだ勢いを加算させた《リーバー》を発動させ、ペネントの胴体部分を切り裂く。

ペネントは硬直し、そして爆散した。

「はぁはぁ」

息が乱れてきた。
どうやら度重なるペネントとの戦闘で、俺もかなり疲労しているようだ。
俺は崩れるように木を背につけて座り込む。
ここはまだ安全地点ではないが、敵モンスターはパッと見近くには見当たらない。
少しでもいい、休憩をしよう。

「ぎゃあああ!!」

尋常ならざる悲鳴が聞こえ、俺は慌てて立ち上がって周りを見渡す。
すると索敵の範囲ギリギリの所でプレイヤーを示すカーソルを発見した。
よく見ると、赤のカーソルも１０個確認出来る。
明らかにこのプレイヤーは囲まれている。
恐らく《実》付きを攻撃したのはこいつだろう。

あの悲鳴から察するに相当パニクっている。
早く助けに行かないとやばいな。
悲鳴が聞こえた方向に走って行こうとすると――

――なんで？――

声がした。
と、言っても周りには誰もいない。
自分の頭の中から聞こえた。
漫画や小説で言う心の中の悪魔ささやき、もしくは本音といったところだろうか。
どうやら俺は精神的にも疲労しきっているようだ。

――そもそもこいつのミスで、俺まで危なくなったんじゃないのか？――

――

「だからって放って置けるかよ」

　　でも、あっちには数十体も敵がいるんだぞ？　そんな武器で相手ができるのか？

　握っている武器を見るとボロボロで今にも折れそうなまでになっていた。
　なるほど、自分の心の本音だけあってなかなか的確だ。

　　ほら、見ろ。　それじゃ行ってもお前も死ぬだけだぜ？

「……そうだな」

　反論はできない。
　自分の声は正直だ。
　これを否定できるやつなんているわけがない。

　　だったら、見なかったことにしようぜ？　そうすれば問題な

「うるせぇ、とっと消えやがれ!!」

ゴツン!!

木に思いっきり自分の頭を叩きつける。

痛みはないが不快な感覚が頭部に感じられ、ＨＰも若干少し減った気がする。

だが、先程までの声は消えており、もうなにも話しかけてはこない。

「まったく心の声ってのは正直で、聞いてると気持ち悪くなる」

まだ僅かに不快な感覚を残している頭部をおさえながら、悲鳴の聞こえた方向を見る。

息をスゥーと、吸い込んで大きく口を開いて叫ぶ。

「待ってろよ、今助けに言ってやる!!」

左足で地面を大きく蹴り、全速力で走り抜く。

索敵に反応したとしたということは距離的に、あまり離れてはいないはずだ。
幸いプレイヤーを示すアイコンはまだ健在のようで、このままのスピードで行けば恐らく後数分もあれば着けるだろう。
だが。
走りながら一つ疑問に思うことを考えていた。
このフィールド、というより《ホルンカの村》は比較的わかりにくい場所にある。
それこそ道を知らない初心者ではたどり着くのは奇跡に近いほどに。
現段階ではこの場所にたどり着けそうなのは、βテスターぐらいだろう。
だからこそ疑問に思うのだ。
なぜ、《実》を攻撃したのかを……
なにも知らない初心者プレイヤーが《実》を攻撃してしまったと言うならまだ話が分かる。
だが、《実》を攻撃した後の恐怖を知っているはずのβテスターがなぜ?
ミスをした、と言うのは考えにくい。

もちろんないことはないのだが、今のＳＡＯはデスゲームと化している。
注意は十分過ぎるほど払っていたはずだ。
それなのに《実》を攻撃した。
実に奇妙な話だ。
まあ、どちらにしろ会えばわかる話だ。
それまでは考えるのはよそ……

「ギャアァァァ!!　嫌だ、死にたくない!!　死にたくないいいいいい!!」

耳に響くような悲鳴が響き渡る。
先ほどの悲鳴の声と同じ、こいつで間違いない。
さらに走るスピード上げる。
と、同時に腰に手を回しベルトポーチに手をかける。
戦闘に使うアイテムはアイテム欄に保存するのではなく、すぐに出せるようにベルトポーチに入れる。
ポーチに手を突っ込み、中に入っているポーションを取り出す。
取り出したポーションをそのまま左手に握り、《スラッシュ》のモーションを取る。

準備は万端だ――――

「うおおおおお!!」

腹のそこから声をだして、叫ぶ。

視認ができる距離まで来ると、少年とそれを囲む１０数体のネペントは確認でき、その内の何匹かはプレイヤーに溶解液を浴びせようとする。

俺は溶解液を浴びせようとしているペネント数匹に走る勢いをプラスした《スラッシュ》を喰らわした。

途端に数匹のペネントは、光の欠片となり、消える。

俺は素早くプレイヤーの方を向き、左手に握っていたポーションを投げ、少し早い口調で述べる。

「俺がしばらく壁タンクになってやるから、さっさとＰＯＴを飲み干せ!!」

普通の人が聞いたらちんぷんかんな言葉だが、どうやら意味がわかったようで、一気にポーションを口に流し込んでいる。

やはりβテスターか。
心の中で確信し、ネペント達の方を向く。
先ほど数匹倒したはずだが、まだまだ数が多い。
「（武器が壊れるのが先か、それとも先にネペントを殲滅するか……）」
フッ、もちろん決まってるよな。
「俺は生きる!!」
右から攻撃を仕掛けてきたネペントに1撃、そのまま刃を返し、切り返しで2撃目を喰らわせ、爆散させる。
次に溶解液を放つモーションをとっているペネントに向けて、《リーバー》を放つ。
その後バックステップをして、一度距離を取り、《スラッシュ》で前にいる数匹のペネントを一掃する。
残りの数匹のネペントたちもなんとか倒すことができ、とりあえず戦闘は終了した。
ふぅ〜、と小さなため息をつきながら俺はボロボロになった剣を鞘に収めて、助けた

少年の方へと歩いていき声をかける。

「お前大丈夫だったか？」

「あ、う、うん。　ありがとう、助けてくれて」

少年はお礼を言った後、俺の方から顔をそらす。

よほど実を割ったことを気にしているのかと思い、俺はできるだけ表情を明るくして話す。

「実を割ったことなら気にすんな。　それよりさっさと《ホルンカの村》に帰ろうぜ」

俺が帰り道を確認するため、メニューを開こうとした時だった。

「帰れない……」

「えっ？」

唖然とした顔で少年を見る。
かえりたくない？
一体どういう事なんだ。
「僕は……僕は……。　取り返しのつかない事を……」
さっきからこの少年が言っていることが俺には分からない。
だが、ただ事ではないことだけはわかった。
「話してくれ、一体なにをしたのかを。」
少年は、目に涙を溜めながら、話し出す。
「僕は、僕と同じくらいの歳のプレイヤーに《ＭＰＫ》してしまったんだ……」
「《ＭＰＫ》!?」

これには流石に俺も驚いてしまった。

《ＭＰＫ》とは、Ｍ（モンスター）Ｐ（プレイヤー）Ｋ（キル）の略称で、意味は文字通りモンスターに故意的にプレイヤーを襲わせて、殺すというものだ。

これは、《ＰＫ》の中でも最も古典的な方法とされ、β版のＳＡＯでも何人か使っていた。

「なんで、そんなことしたんだ？」

少年に問いかける。

「僕は、怖かったんだ……」

少年はうつむいたままつぶやく。

「この現実ではないこの世界ゲームで人知れず死ぬのがたまらなく怖かったんだ……。その心の弱さのせいで……　」

少年は両膝をおって、泣きながら四つん這いになる。
こいつは自分がしてしまったことに対して、後悔をしている。
それは、誰が見ても分かることだった。
恐怖に屈してしまい、取り返しのつかない事をしてしまったと。
だが、今するべきは後悔することじゃない。

「お前、名前はなんて言うんだ？」

「えっ？」

少年は涙を垂らしながらこちらを見る。

「俺はシンジって言うんだ。　お前の名前は？」

「……僕は、コペル」

「よし、コペル。　さっさと立ち上がれ、いくぞ」

「えっ？」

コペルはきょとんとした顔で呆然としている。

だが、俺は構わず続ける。

「コペルが《ＭＰＫ》した奴を助けに行くんだ。　まだ間に合うかもしれないだろ。」

「でも……」

ためらっているコペルに対して、俺は手を差し出す。

「手を取れ、コペル。　お前はまだやり直せるんだ。」

「……どうして」

コペルは、小さくつぶやくように言う。

「どうして他人の僕にそこまでしてくれるの？」

コペルの問いに俺は一瞬戸惑い、思わず手を引っ込める。

考えてみれば自分でもなんでこんなことをしているか分からない。

だけど――――

「理由なんて俺にも分からない。　ただ、やるべきだと思うからやるんだ」

俺はもう一度手を差し出す。

その手をしばらくコペルはしばらく見つめ、右手で顔をこすり、手を取る。

「君って意外と見た目と違って、熱血でお人好しなんだね」

「ああ、自分でもびっくりだ。」

コペルの手を引いて、立たせると、コペルは北西の方に指を指す。

「多分あっちの方角だと思う」

コペルの指差した方を見ると、かすかに敵を示すカーソルが見える。

「分かった、さっさと行こうぜ」

「うん」

俺とコペルは北西の方角に向かって、走っていった

デスゲームの初日　後編

「コペル、後どのくらいで着く？」

「多分、もう少し」

あれから俺たちはひたすら暗い森の中を駆けていた。

《実》を割った場所には、数分で２０～３０体のネペントが集まり、時間が経つに連れてさらに数を増やしていく。

通常なら割った時点で囲まれ、３６０。からの一斉攻撃を喰らい、１分と持たない。

しかし今回の場合逃げたコペルに半分の数のネペントがついてきた為、《実》の割れた場所にも半分の数のネペントしかいないはず。

それでもネペントの数は決して少なくはないが、生きている可能性十分にある。

「（急げば、まだ間に合う!!）」

さらに走るスピードを上げようとした時だった。
背中から全身に掛けて衝撃を受ける。

「シンジ!!」

コペルの叫び声が聞こえる。
俺は前のめりになって、倒れそうになる体をなんとか右足で踏ん張り、方向を素早く後ろに向ける。

「《実》の匂いに釣られてきたネペント共か……」

そこには数十体のネペントが迫って来ていた。
辺り一面が敵カーソルで埋め尽くされ、辺り一面が赤い海のようになっていた。
俺はすぐさま剣を抜き、構える。
もし、こいつ等を無視して目的地に急げば、ネペント共をそのまま引き連れることとなり、状況が悪化するどころか全滅の可能性すらある。
だからといって戦えば、助けに行けなくなり、最終的に……。

ダメだ!!
どちらを選んでも悪い方向にしか進まない。
どうすればいいんだ。
そんな時だった。
策が思いつかず、悩んでいる俺の目の前にコペルが突然立つ。
「僕がここを足止めする。　シンジは先に行ってくれ!!」
「……はっ?」
一瞬、コペルの言葉が理解できず呆けた声を出してしまう。
それから数秒してコペルの考えを理解し、俺はようやく口を開く。
「コペル、お前正気かよ!?　この数を一人で相手にするということはどういうことか!!」
「分かってるよ。　もしかしたら死ぬかもしれない。　でも、これしか方法がないんだ

!!」

コペルの言うことに俺は反論できなかった。

確かにこれ以外にこの先に居るプレイヤーを助けに行く方法は、ない。

だが、それは同時にコペルが犠牲にならなければいけないということでもある。

「だったら俺が代わりに足止めする。　だからお前が……」

「ダメだ!!」

コペルに強く否定され、気圧される。

「これは元々僕が元凶で引き起こしたことだ。　一番危険な事を僕が引き受けるのは当然だ」

コペルの顔から覚悟が伝わる。

もう、こいつは何を言われても主張を曲げないだろう。

「……分かった。　だけど、絶対死ぬなよ。　あっち助けたら、すぐ来るからな」

俺は、ネペント達に背を向け、目的地に急ぐ。

「巻き込んでごめん。　そして……ありがとう」

その後コペルの勇ましい叫び声と、爆散するときの音が聞こえてきた。

「……思いっきり死亡フラグじゃねーか」

俺は再び目的地を目指す。

□　□　□　□　□　□　□

「どけよ!!」

俺の目の前に居る、ネペント共を切り伏せながら先へと進む。
《実》の割れた地点が近いためか《索敵スキル》を使っても、戦わないで進めるルートが少なくなってきていた。
それでも、一応敵の少ないところを突いているのだが、流石にノーダメージでは行けないらしい。
俺のＨＰは、レットになるスレスレまで迫っていた。
このまま進めば、もしかしたら死ぬかもしれない。
誰に看取られことなく、一人こっそりと光の欠片となって。
そんなことはご免だ。
まだまだ、現実あっちでやりたいことはたくさんある。
じゃあ、逃げるか？
それもご免だ。
２人も見捨ててまで、生きたくはない。
それに会ってからまだ1時間も経っていないが、コペルが人より精神的に脆いのは俺でもよく分かる。
そんなあいつが、今自分の罪に正面から向き合ってんのに俺が逃げられるかよ。

だったらどうすればいい？
きまってんだろ。

「どっちもやってやるだけだ!!」

しばらく走ると青いアイコンとそれを囲む赤いアイコンが出現する。
赤いアイコンが敵を指すなら、青いアイコンはプレイヤーを指す。
俺は剣を抜き、しっかりと握るり、剣を振り上げてモーションを取る。
刀身が燃えるようなオレンジに染まり、キュイーンと言う音が鳴り響く。
そして木と木の間を抜けた、少し広い空間に入ると同時にそこに居た複数いるうちのネペント1匹に《リーバー》を喰らわせ、爆散させる。

「!?　あんたは……」

俺の突然の登場に、そこに居た少年プレイヤーは戸惑っている様子だったが、説明する時間はない。

「ちょい急いでいるんだ。　説明は後でするから、まずはこいつらの殲滅からしようぜ」

「……よく分からないけど、確かにそれが先決だな」

そう言うと、そのプレイヤーは再び武器を構える。

「理解が早くて助かる」

俺も武器を構え、戦闘態勢を取る。

数は、ざっと２０匹。

「右の方を頼む。　俺は左をやる」

「分かった」

互いに短くうなづき、左右に別れてネペントの元に駆ける。

「ギギィ!!」

一気に複数のタゲが俺に集まり、無数のツルが俺のもとへ伸びる。
βテスター時代の俺なら、かわしきれずに数発は当たっていただろう。
だが、１００匹以上のネペントとの戦闘をこなしてきた俺には、ネペントの正面からの攻撃は一切当たる気はしなかった。
体が考えるよりも先に動き、無数のツルをすり抜けながら1匹ずつ確実に茎を切り落とす。
目の前で幾千の光の欠片が桜吹雪の如く散っていく。

「終わりだ」

その場から一歩下がり、今まで俺の居た所にこちら方面の全てのネペント集まる。
同時に俺の刃も完全にオレンジに染まり、剣を横薙に振るう。
重い手応えが数秒続き、やがてネペントのウツボ部分がいくつも宙に舞った。
やがて残された根部分が爆散していく。

「殲滅完了。　後は……」

右を見ると、どうやらあっちも片付いたようだ。
少年は武器である片手剣を左右に振り、剣を鞘に収めてこちらを向く。

「ありがとう、助かったよ」

「いやいや、礼に及ばないさ……って、あれ？」

俺は少年プレイヤーの顔を見てしばし唖然とする。
思えばここに到着した時に急いでいた俺は少年の顔をはっきりとは見ていない。
だから気付けなかった。
そいつがまさか

「えっともしかして川越北中２ー１の桐ヶ谷さんですか？」

同級生だとは。

デスゲームの初日　クライマックス

しばし沈黙が走る。
なんと言うか、あれだ、あれ。
なんかものすごい気まずい。
まさかコペルが《ＭＰＫ》（未遂）した相手が、俺の同級生だったとは。
しかもクラスのかっこいい男子ランキング（非公式）堂々の1位であり、ゲームオタクのくせして成績優秀で、オマケに女子にも見える美少年の桐ヶ谷和人だったとは。
……なんか悲しくなってきた。
そんなこんなでちょっとブルーになった俺だが、向こうも俺が誰なのか分かったのか口を開く。
「えっと……　真司……さんでいいのかな？」
「あ、ああ。　合ってるよ」

「えっと、リアル名は流石にアレだから、できればプレイヤー名を教えて欲しいんだけど……」

「ああ、悪い。　ゲームの中じゃリアルの事はＮＧだったな。」

ＳＡＯにはβテスター時代からの暗黙の了解がいくつかある。
その１つが現実（リアル）の事を話してはいけないということだ。
理由として挙げれば、１番は世界観が壊れるからだろう。
例えば、ファンタジーな世界で現実のドロドロとした話をしたらどうなるだろう？
興ざめもいいところだ。
これは何もＳＡＯだけの話ではなく、他のオンラインゲームも物によってはこのような場合がある。
もちろんこれは強制というわけではないので、双方の了解があれば問題はない。

「えっと俺の名前は、シンジだ。」

「へ？　いや、俺はプレイヤー名を知りたいんだけど……」

「俺のプレイヤー名は、下の名前と一緒なんだ」

「……てっ、ことはまさか？」

桐ヶ谷が何か考えている。
そんな時、俺はふと俺のＨＰバーの下にあるもう一つの小さなＨＰバーを見る。
これはパーティーを組んでいる時に現れる物で、パーティーを組んでいるとチーム全員の体力を見ることが
できる。
コペルとは走っている時に、連携を取りやすくするために組んでいた。

「……マジか」

コペルの残り体力を見て、呆然とする。
彼の体力は、もう４割も残っていなかった。

……まずい。
一気に焦りが吹き出す。
ここで時間を使いすぎた。

「桐ヶ谷、先に《ホルンカ村》に行っといてくれ」

「え？　急にどうしたんだ？」

「説明してる暇はないんだ。　悪い」

後ろからの呼び止める声を無視し、走り出す。

□　□　□　□　□

今日はなんて日だ。
思えばさっきから走りっぱなしで、俺の体力も限界が近づいてきた。

視界が霞む。
ここがいくら仮想世界でも疲れもするし、気絶もする。
仕組みは脳に負荷がかかるとか、そんな話を聞いたことがあるが、馬鹿な俺に正確なことは分からない。
が、限界が近づいているのは明白だった。
多分下手したら今にも倒れそうだ。
だが、倒れるわけには行かない。

「約束したからなぁ……」

こんな状態の俺が行っても、足でまといになるだけかもしれない。
だけど、それでも行かなければいけないんだ。
約束を守るために。
ギィン!!
鈍い金属音が聞こえてきた。
この音は、恐らく盾で攻撃を防いだ際に聞こえる音だ。

「（近い）」

これで終わる。
腰の剣を今まで以上に力強く握り、抜く。
これで、正真証明最後だ。
自然と走る速度が上がる。

「う、うおおおおおおおおお!!」

森中に俺の叫びが、いや、咆哮が響き渡る。

「シンジ!?」

ようやくコペルとネペントの集団が視界に入る。
見ればコペルの右腕に剣は無く、残っているのは鉄くずのような盾のみ。
これだけでよく耐えたものだ。

「あっちは助けた。　コペル、お前は下がれ。　ここからは俺がやる!!」

「無茶だ。　その体力で一人で戦おうなんて」

「武器も無いお前よりはマシだ!!」

俺の言葉に何も言い返せないコペルは、苦渋の顔をしてその場から下がる。
これで、俺が死んでもコペルは生き残れる可能性はあるだろう。
もうなにも考えなくていい。
目の前のネペントを全滅させることだけ考えられる。
スウゥゥー。
乱れた呼吸を、整える。
日が登り始めている。
思えば長い1日だった。
初日からこんなことになるなんて考えても見なかった。
だけどそれもようやく終わる。

「最後の勝負だ、ネペントオオオオオオ!!」

大地を蹴り、ネペントの集団に突っ込む。
ただ。
ただひたすらに剣を降り続け、光の欠片を撒き散らす。

「プシュウウウ」

後ろからのネペントの溶解液放出の合図。
今の時点で喰らえば、即死亡確定の狼煙が上がるだろう。
俺は瞬間的に体をひねり回し蹴りを喰らわせ、標的をズラす。
放出された溶解液が木に当たって、シュュュュウという音を発する。

「くたばれ!!」

先ほど溶解液を放出したネペントに近づき、攻撃させる暇なく茎を切り落とし1撃で葬る。

ビシッ!!
ネペントを倒したと同時に、剣の刀身にヒビが入る。

「ちっ、こんな時に……!!」

ネペントからステップを使って5メートル距離を取る。
この剣は恐らく、あとひと振りで光の欠片と化すだろう。
ネペントの数は後5匹。
一太刀でこいつらを倒すには《スラッシュ》による範囲攻撃を行うしかない。
だが、それを1匹でも外せば俺は……。
緊張が全身を走る。
手が小刻みに震えだす。
俺はもしかしたら今、ようやく現実を直視したのかもしれない。
このゲームが本当の意味のデスゲームだと。
思えば、本当に正気のある奴ならまず《始まりの街》から出ようとは思わないだろう。
まずは救助を待つべきだ、と考えるはずだ。
それなのに今、俺がここにいるのは「出来るだけの事をやる」と心で言いながら本当

は先に進みたかった
だけなのかもしれない。
ただこのゲームを攻略したい、と言う気持ちをあたかも正当な理由だと思いたかったからなのかもしれない。
そしてそれは、今頃動き出しているだろうβテスター達にも同じことが言えるだろう。

――――――もっと先に進みたい

この気持ちこそが俺を、いや俺たち(βテスター)を先に進ませている。
茅場はチュートリアルでで『これはゲームであっても遊びではない』と言った。
だが、その言葉は裏を返せば『遊びでなくてもこれはゲーム』だということだ。
俺はまだこのＳＡＯという名のゲームの全てを見ていない。
だから俺はたどり着きたい。
この先を。
第１００(頂上)層にたどり着きたい。
そのためには、まずはこいつらを倒さなければいけない。
自然と手の震えは収まり、気のせいか気が軽くなった。
いける。

今の俺ならば必ず。
俺はまだ先に進める。

「うおおおおおおおお!!」

地面を足跡がくっきりと残る位まで踏みしめて、蹴り上げる。
そんな俺を向かい撃つか如く、ネペントの雨のような攻撃が迫る。
だが、奴らの攻撃にパターンを知り尽くした俺に正面からの攻撃などでは当たるはずもない。
今の俺の状態なら尚更だ。
ネペントの攻撃を全てかわした俺は、そのまま横を通り過ぎくるりと１８０。回転する。
見えるのは隙のあるネペントの背後の姿。

「決まりだあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

オレンジに染まり尽くした剣がネペントの茎を部分を捉える。

２匹、３匹。
とっ、光の欠片となり消えていく。
４匹目からは、刀身のヒビが広がり始めていた。

「（くそ、まだ折れないでくれよ……）」

祈るように４匹目を切り終わり、５匹目に入る頃にはかろうじて形を維持している状態になっていた。
シューイーン。
何かが光の欠片になる際に聞こえる、音が聞こえる。
武器が耐久の限界を迎えたのだろう。
が、既に剣は茎を切り落とす寸前に来ていた。

「お、わりだあああああああ!!」

ウツボ部分が俺の叫びとともに天高く飛び上がっていく。
同時に、今まで俺の手にあった感触も消える。

武器消失(アームロスト)。
俺は小さく共に戦ってくれた剣(相棒)にありがとうと、つぶやいてコペルの方へと行く。

「大丈夫か？」

「大丈夫って、それはこっちのセリフだよ。　いくらなんでも無理が……」

「もういい。　分かった、分かったて」

コペルが長ったらしく説教を始めそうなので、手で制する。
ただでさい、疲れているのに説教なんて喰らったら気が滅入る。

「とりあえず帰ろう。《ホルンカの村》に。　あいつも待ってるぜ」

□　　□　　□　　□

あれから俺たちは《西の森》からなんとか帰ってくることができた。
俺もコペルも武器は壊れてしまったため、ぶっちゃけどうやって帰ろうかと思っていたが、どうやらＰＯＰが枯渇していたため戦闘することなく街へたどり着くことができた。
まあ、あれだけ戦ったんだから当然だろう。
村の時計を見ると夜の９時を指しており、辺りには数名の元βテスターらしきプレイヤーがいた。
だが、その中に桐ヶ谷の姿はなかった。
もう１度辺りを見回したが、やはり桐ヶ谷の姿はない。
「かしいな～。　ちゃんと戻ってきてるはずなんだけどな。　しょうがない、奥まで行くか」
「うん、分かった」
俺とコペルは村の奥を目指すため歩き出す。
途中そこらの宿などによっては見たが、桐ヶ谷はどこにもいなかった。

そんなこんなで1つ1つしらみ潰しに探していくと、とうとう最後に残ったのは、《森の秘薬》クエの発生
場所である民家にたどり着いた。

「あとはここだけか」

ドアノブに手をかけ、開けようとする。
が、ドアノブは回らずうんともすんとも言わない。
おかしいと思い、ドアをよく見ると！マークが表示されていた。
これはクエスト進行中を意味していた。
ということはつまり……

「もしかして、ここに……グヘッ!!」

突然ドアが開き、ドアの前に居た俺は顔面を見事に強打した。
ＳＡＯでは痛みというものはないが、衝撃は感じることができる。
顔を抑えつつ、ドアを開けたプレイヤー見ると、申し訳なさそうな手を伸ばしてきた。

「あっ、ごめん。　大丈……　って、シンジ？」

「はは、よう！　待たせたな」

桐ヶ谷は目を丸くして、こちらを眺めている。

だが、すぐにコペルに気づいたのかコペルの方を見る。

「コペルなのか？」

「……」

コペルはなにも言わず立ち上がり、桐ヶ谷の前に膝を付いて頭を下げる。

「ごめん!!　僕は君に取り返しのつかない事をしてしまった。　許されることじゃないのは分かってる。でも謝りたいんだ。」

コペルの表情は見えないが、雰囲気だけで真剣さが伝わってくる。

「僕にできることなら何でもやる。　それがなんだとしても」

桐ヶ谷はそのコペルをじっと眺めたあと、意外な一言を口にする。

「じゃあ、今度クエストを一緒に頼むよ」

「へ？」

「だからさ、なんでもやってくれるんだろ？　だったら一人じゃ難しいクエがあるんだ。一緒にやろう」

その言葉には俺も驚いた。

俺は桐ヶ谷の性格は分からないが、とりあえずぶちぎれると思っていた。

それが一般の反応だ。

だが、桐ヶ谷はぶちギレどころか怒りもしない。

というかこんな台詞前にもどこかで……。
ふと、頭にあいつの顔が浮かぶ。
……まさか。

「うぅ……ありがとう、キリト」

キリト。
その名前を聞いた瞬間思考が停止した。
そして数秒経ってからゆっくり桐ヶ谷の方を見る。
さらに数秒見て、俺は深呼吸をして、

「お前かいいいいいいいいいいいいいい!!」

暗闇に光る流れ星

俺はこれまで流れ星を一度も見たことがない。
と、言っても本やテレビ等ではちらっと見ているので全くというわけではない。
ただ、生で見たことはない。
始めて流れ星を見たのは小学４年生頃だった
テレビで始めて流れ星を見て、その一瞬にして消えてしまう美しさに目を奪われ、自分の目で一目見ようと窓から妹と一緒に流れ星を探したのは今でも覚えている。
その後、結局流れ星を見つけることはできずに俺達は同じ布団にくるまりながら寝てしまった。
余談だが、その後妹に正拳突きを喰らった。
そんな懐かしい思い出を思い出しながら、目の前の流れ星を見ていた。
ただしその流星が輝いているのは夜空ではなく、暗い迷宮ダンジョンの奥でだが。

「とんでもないな……」

目の前の一細剣使いの剣さばきを見ながら、つぶやく。

「ああ、俺もここまですごい《リニアー》はβテスター時代でも見たことがない」

俺と同じくその様子を見ていた片手剣使いソードマンこと、キリトもその剣さばきに驚愕している。

レイピア使いの使っている単発突き攻撃《リニアー》は、細剣カテゴリーで一番最初に取得できるソードスキルだ。

この技自体はただ真っ直ぐに突くだけの技だが、なんと言っても速い。

多くの経験を重ねた俺やキリトですらスキル発動時の光しか目で追えないほどに。

まさに《閃光》といっても過言ではないだろう。

そんなレイピア使いと戦っているモンスターはレベル６亜人モンスター《ルインコボルド・トルーパー》。

こいつは中々強敵で初見で戦えば、結構手こずる。

だが、レイピア使いはトルーパーの攻撃を華麗にかわし、機械さながら正確な動きでカウンターを喰らわせて圧倒する。

その後、レイピア使いは《リニアー》でトルーパーの胸当たりを貫いて、無傷で戦闘

を終了する。
その戦闘の一部始終を見ていた俺は、あまりのすごさに思わず拍手をする。
「!?」
突然の拍手の音に躍いたのか、レイピア使いはこちら向いて剣を構える。
「(やっべ、脅かしちまったか)」
自分の軽率な行為を心の中で反省しながら、両腕を軽く上げて(腕を上げたのは俺だけだが)キリトともに歩き出す。
「悪い、驚いたか?」
俺たちの姿を確認すると、レイピア使いは剣を収め壁に背を付いてズルズルと座り込む。
そのまま首をクイッと動かし、早く行けというようなジェスチャーを見せる。

ハハッと苦笑しながら、ジェスチャーを瞬時に理解し、そそくさその場を立ち退こうとした時だった。

「……さっきのはオーバーキルすぎるよ」

普段は人にあまり話しかけないはずのキリトがレイピア使いに話しかけた。

「キリト!?」

そこから速やかに立ち去ろうとした俺は、キリトのせいで急ブレーキをかける羽目になった。

レイピア使いは厚手のケープのフードを上げ、鋭い目つきでキリトを睨むように見る。

ヤバイ、完全にキレた。

そう思った俺だったが、約数秒後、頭を傾けるところを見ると怒っているというより、言葉の意味が分からないらしい。

そのジェスチャーに俺は疑問を覚えた。

いや、別にジェスチャー自体に疑問を覚えたわけじゃない。
《オーバーキル》を知らないことに疑問を覚えたのだ。
《オーバーキル》とは、残りＨＰに対して過激な攻撃をする。
分かりやすく言えば、死にかけの敵に必殺技を喰らわして殺すといえば分かるだろう。
この用語はＭＭＯＲＰＧでは、よく使われており、βテスターならもちろん誰でも知っている……。
まさか。
再びレイピア使いに視線を向ける。
《オーバーキル》については、もうキリトが説明した後であり、話題は別な方に移っていた。
「……どうせみんな死ぬのよ」
どうやら俺が考えているうちに、かなり話が飛んだようだ。
しかも重い方に。

「じゃあ、私もう行くから」

レイピア使いが立ち上がり、よろよろと一歩を踏み出そうとした時。
突然目から生気が消え、倒れかける。
その倒れそうになる彼女を寸前でキリトが、受け止める。

「大丈夫か？」

心配になり、俺が近づくとキリトは「気を失っただけだ」と答え彼女を抱きかかえる。

「この様子じゃもう戦闘は無理だな。　シンジ、俺はこの子を運ぶから悪いけどここからの戦闘頼む」

「そんぐらい任せろ」

俺は新しく手に入れた曲刀《シルバーサーベル》を抜き、目の前に湧出ポップしたモンスターを葬る。

□　□　□　□　□　□　□　□

「なあ、キリト。　お前その子のことどう思う？」

歩きながら俺はキリトに尋ねる。

「えっ？」

「その子の戦い方のことだ。　気づいてたんだろキリト？　じゃなくちゃお前が自分から話しかけることなんかないからな」

俺はキリトが抱えている先ほどのレイピア使いを指差す。

キリトは理由は分からないが、この世界ＳＡＯでの他人との接触を極力避けている。βテスターの時やリアルでもそうだったと言えばそうだったのだが、最近はその時以上に避けていた。

まるで自分自身に戒めをかけているように。

「ああ、シンジが思ってるようにこの子は多分βテスターじゃない」

「やっぱりそうだよな。　あの身のこなしや剣さばきは見事だったんだが、戦い方がどうもな」

俺の言葉にキリトも頷く。

《オーバーキル》の事以外にも、思い返せば色々戦い方に不審な点はあった。

恐らくキリトは俺よりも早くにそのことに気づき、疑問に思って声をかけたのだろう。

……まあ、理由はそれだけじゃないような気がするが。

とっ、そんなことを考えてると突然キリトが足を止める。

どうしたんだ？　と思い前の奥の方を見るとそこには先ほどと葬った種類と同じコボルドが五～七匹ぐらいの数で待ち受けていた。

「数が多いな。　ここは俺も戦おうか？」

そう言い、キリトが抱えているレイピア使いを地面に下ろそうとする。
だが、俺はそんなキリト手で制する。
「こんな数ぐらい楽勝だぜ。　それにお姫様を地面に下ろすなんて失礼だろ？」
そう言って、俺はコボルドの方へと歩いていく。
奴らの五メートル位に近づくと、敵である俺を認識したのか一斉にタゲが俺に集中する。
そしてその内の一匹のコボルドが俺に斧を振り上げながら迫ってきた。
「遅いぜ!!」
振り下ろされた斧を寸前でかわし、腰に差してある愛刀を抜く。
抜いた時の勢いを殺さず、斧を振りおろして無防備状態のコボルドの背中へと一撃を喰らわす。
さらに攻撃の手を緩めず、追い打ちにソードスキル――――飛び込み斬撃技《フェル・クレセント》を弱点へと放つ。

「まず一匹」

コボルドは弱点を突かれ、ＨＰがゼロになり光の欠片と化した。
その一匹のコボルドが倒されたのを皮切りに残りのコボルド全匹が俺を中心に円を描き、一斉に攻撃を開始した。
そんな危機的状況の中で俺は冷静に、迫り来るコボルドの攻撃をかわし、剣で弾く等して対処した。

「一対多数の戦闘は既に習得済みだぜ」

俺は何週間前のリトルネペントとの戦いを思い出していた。
あの時とは場所も敵もレベルも違がうが、今の戦闘でその時の経験は役立っている。
そしてその経験が自信になっているからこそ、俺は多数のコボルドの攻撃を冷静にさばくことができているのだ。

「そろそろ終わりだ!!」

コボルドの斧を弾き、ソードスキルのモーションを取りながら駆け出す。

「うおおおおおお!!」

吠えながら、俺は片手用曲刀基本スキルである《スラッシュ》で一気にコボルド達を切り裂く。

そして最後の一匹切ると同時に、端からパリーンとガラスが割れるような高い音が鳴り響いていく。

「討伐終了と」

剣を鞘にしまい、キリトの方を向き

「そんじゃ、行くか」

俺とキリトは再び歩き出した。

情報屋アルゴ

仮想空間で気を失うのはどういう仕組みなのだろう。

気絶というのは脳の脳の血流が瞬間的に滞り、機能が一時停止する現象で、その原因とされるものは色々とある。

しかし、それ等は大概は肉体的な原因で、今回のレイピア使いのように仮想世界にフルダイブしている状態ではそのようなことはまずありえない。

ましてや自分たちの体は今病院にあるだろうし、健康状態に問題があるとも思えない。

では、なぜ？

考えられるとしたら、無茶な連戦による疲労から神経反射性の失神を起こした。

「つまり脳に負担を掛け過ぎて、脳が体の安全のために機能を一時的に停止した。　ってことでいいのか？」

「まあ、平たく言うとそうだな」

へ～、と思いながらキリトの話を聞く。
迷宮区から気を失ったレイピア使いを救出してから、数十分。
俺たちはレイピア使いの少女を所持していたカーペットの上に寝し、暇なので仮想空間での気絶の仕組みについて話していた。
とっ、言っても俺はほとんどキリトの説明を聞いているだけなのだが。

「それにしてもよ。　気絶するまで迷宮に篭るなんて自殺行為なことを、なんでこのレイピア使いさんやってたんだろうな？」

「それは俺にも分からない。　ただ彼女は何かやけくそになってる、そんな感じがした」

「……やけくそね～」

確かにそれは俺も感じていた。
彼女からは生きるために戦おうというより、どうせ死ぬのならこの世界に一矢報いてやろう。

そんな風に思えた。

「もったいないな。　あんなスゲー技術持ってんのに」

「ああ。　俺も同感だ」

俺とキリトは互いに頷く。

その時だった。

後ろから突然物音がし、俺は後ろを振り向く。

するとそこには先程まで気絶していたレイピア使いが、こちらに痛いぐらい鋭い眼差しを向けながら睨んでいた。

「よ、よぉ～。　よく眠れたか？」

おそるおそる声を掛けてみるが、レイピア使いの目は変わることなくこちらを睨み続けている。

恐え～、ダッシュでこの場から立ち去りて～。

と、思っていると今度はレイピア使いが声を上げた

「なんで助けたの？」

「そ、そりゃあーなあ」

なんとなく分かる。

ここでもしも下手なことを言ったら俺は即座に切り捨てられる。

もちろん精神的に。

勘弁してくれよ、俺のライフはもうゼロよ！

と言うことでキリトの方をチラ見して、「お前が何か言ってくれ」とアイコンタクトを贈る。

そうするとキリトはやれやれと言ったような顔をして、レイピア使いに向かい

「別にあんたを助けたわけじゃないさ。　ただ、最前線に気絶するぐらいまで居たって事は、未踏破エリアをかなりマッピングしているはずだ。　それが消滅しちゃうのは少しもったいないと思ってね」

と言い放つ。
……なんと言うかキリト。
確かにこれなら切り捨てられるようなことにはならんと思うけどよ、何かひどくね？

「……なら、持って行けば」

レイピア使いは低くつぶやき、メインウインドウを開く。
最近ようやく慣れたのだろうか、少々ぎこちない手つきで操作しながらマップデータオブジェクト化し、こちらに放り投げてきた。
俺はそのマップデータを右手で掴む。
はずだったが、誤って弾いてしまい、マップデータは俺のすぐそばに落ちる。
めっちゃくちゃ恥ずかしい。

「それであなた達の目的は達成したでしょう。　じゃあ、私は行くわ」

と言い残し、レイピア使いはよろよろと立ち上がりながら再び迷宮に向かう。

その足つきは僅かにふらついている。
きっとまだ消耗は完全に回復していないのだろう。
と言うか回復するわけがない。
仮想空間で気絶なんてよっぽどのことだ。
恐らくこのまま止めずに行かせたら、今度こそ彼女は誰も居ない暗い迷宮で果てるだろう。
それこそ大気圏内で燃え尽きてしまう流れ星のように。
しかしだからと言って彼女を止めること等できるのだろうか？
そもそも俺たちは彼女のことについて何も知らない。
彼女の方も俺たちに何も言われる筋合いなどないはずだ。
つまり助ける義理もなければ、助けられる義理もない、と言うところだ。
だから俺たちは何も言わずにこの場を去るしか――――

「ちょっと待てよ」

気がついたら言葉を発していた。
レイピア使いは俺の声に反応し、迷宮に向かう足を止めてこちらの方を向いた。

何をやっているんだ俺は。
なんの理由もなしに彼女を止めた所で、彼女は迷宮に行くに決まっている。
無駄なのだ、止めても。
なのに何故俺は止めた？
そんなことを考えているうちにレイピア使いは

「……用がないなら行くわ」

そう言い、再び迷宮へと歩いて行こうとする。
とにかく止めねば。
今までの疑問全てが吹き飛び、とにかく何か言おうと言葉を模索する。
しかし彼女を引き止められそうな言葉など何も浮かんでこない。

「（何か、何かないのか？）」

考えつかないままレイピア使いの足が動き出した時だった。

そんな時。

「今日の夕方、迷宮区最寄りの《トールバーナ》の町で、一回目の《第一層フロアボス攻略会議》が開かれるらしい」

「……え？」

レイピア使いは再び歩を止め、後ろを振り返る。

俺もそれに続いて振り向く。

言葉を発していたのはキリトだった。

と言うより三人しかいないので当たり前だが。

「あんたも基本的にゲーム攻略のために頑張っているんだろ？　だったら《会議》に顔を出してみてもいいんじゃないか？　幸い予定の時間には今から行けば間に合う」

キリトは言いながら、《トールバーナ》の町を指差す。

レイピア使いは行くか行かないかを考えているのか、数秒間じっと動かなかったが、

「……分かったわ」

と答え、会議に出ること宣言した。

俺はその時何故か心の中でホッとしている自分に気がついた。

「(俺はなんで安心したんだ?)」

またしても疑問が浮かぶが、今は頭の隅に置いておこう。

そう思いながら俺とキリトと謎のレイピア使いは《トールバーナ》の町を目指して足を進めた。

□　□　□　□　□

「ふう〜、やっと着いたか」

森を抜け、そびえ立つトールバーナの北門をくぐりながらつぶやく。
ここに来るまでの間すごい気まずかった。
なんせ、レイピア使いは俺たちとある一定の距離をとって歩くし、会話も当然なし。
俺にとって、その時間は地獄だった。

「会議は街の中央広場で、午後四時からだそうだ」

キリトが門をくぐってしばらく歩いてからレイピア使いに言い、彼女はこくりと頷くと、俺たちの前を通り過ぎていく。
どうやら行動を共にするつもりはないらしい。

「妙な女だよナ」

「うおっ！」

突然、後ろから声が聞こえ俺は思わずヘンテコなポーズを取りながら振り返る。
そこに居たのは俺より頭一つと半分身長の低い女性プレイヤー。

「びっくりさせんなよ、アルゴ!!」

「にひひ、相変わらずシン坊は面白いナ」

ふてぶてしくけたけた笑うアルゴに、若干コノヤローと思ったがいつものことなのであえて何も言い返さない。

しかしその代わり、俺はアルゴにある質問をした。

「なぁ、アルゴ。　お前、あのレイピア使いのこと何か知ってんのか?」

「五百コル」

アルゴは五本の指を立てながら言った。

……いや、分かってはいたんだ。

アルゴは情報屋で、βテスターの時代から情報の信用度は高かった。

それはデスゲームと化したこの世界でも同じで、多くの人が彼女から情報を得てい

る。

しかし、情報を得るのにただでと言うわけにはいかない。

彼女から情報を得るためには、その情報に応じた《コル》、つまり情報料を支払わなければいけない。

それは今回のことも例外ではなく、あのレイピア使いの情報を知りたきゃ金をよこせという事らしい。

だが、生憎俺は女の子の情報を金で買うほど落ちぶれちゃーいない。

「残念だが遠慮するぜ。　なぜなら俺は紳士だからな!!　……ってあれ?」

大声で叫んだ俺だが、気づいたら二人の姿が見当たらない。

居るとしたら、俺のことをチラチラ見ながら小爆笑している周りのプレイヤーぐらい。

……これは、なんの罰ゲームですか?

羞恥心から、早く二人の居場所を探そうと辺りを見渡すと、路地を発見。

恐らくいつもの交渉のために、路地に場所を移動したのだろう。

俺はその場から逃げるように路地の入り込み、恥ずかしさを紛らわせるかのように

走った。
しばらく進むと、奥の方にキリトとアルゴが見えた。
「お前ら、置いてくなんてひどいぞ!!」
半分怒り、半分涙目で二人の元に急ぐ。
が、今日は不運なのか目の前にあった小石に足をつまずいてしまう。
グラっと体が前のめりに倒れていく。
そして俺の顔はそのまま地面とキスすることに……
なっただろう、現実ならば。
しかしこの世界では違う。
俺は現実ではありえない反応速度で手を顔の前に。
そして、地面に着くと同時に思いっきり伸ばす。
すると、俺の体は宙に浮き、縦に一回転。
その動きは、傍から見たらオリンピック選手さながらの動きだろう。
そして俺は華麗に――――

「うぐっ!!」

壁にキスした。
俺の体はそのままズルズルと落ちていき、そのまま地面にもキスすることになった。
しばしその場には沈黙が走る。

「お、おい大丈夫か?」

キリトが心配したのか、俺の元に駆け寄ってくる。
しかし、俺はキリトを手で静止する。
今こられたら、俺はもう立ち直れない。
数秒間無言のまま仰向けになり、ようやく立てるまでに回復したのでむくっと立ち上がる。

「まーた、キリトの剣を買取りたいってやつの代理交渉かよアルゴ?」

「まさかのなかった事にするつもりなのカ!?」

「なかったこと？　なんのことだよ、アルゴ」

「……まあ、いいカ」

アルゴは何故か変な顔をしたが、俺は気にせずに彼女の話を聞いた。

「依頼主は剣の買取価格を二万九千八百コルまで引き上げるそーだ」

「だいたい、三万コルか。　相手さんも頑張るね～」

三万コルと言えば、今の段階ではかなりの大金だ。

普通、今の時期に武器にそこまで出す奴など居ない。

「こりゃあ、案外売ったほうが利があるんじゃないか？」

「いや、俺はどれだけ上積みされてもこの剣を売るつもりはないよ」

「はは、だよな」

俺もキリトと同じ立場だったら恐らくそう言うだろう。

今まで共に戦ってきた相棒を、そうやすやすと売ることなんか出来るわけがない。

それに買取たいと言う相手も怪しいしな。

「なあ、アルゴ。　買取りたいって奴の口止め料はいくらだっけか？」

「確か千コルだナ」

「千コルねぇ～」

口止め料とは、アルゴに代理で交渉させている奴の名前を伏せてもらうために予め払う金のことだ。

もしこちら側が正体を知りたいと思ったときは、相手以上のコルを支払う必要がある。

しかし、支払ったからといって必ずしも正体がわかるわけではなく、相手がさらにコルを支払えば、こちらもさらにそれ以上のコルを支払わなければ、正体を知ることができない。

「キリト、試しに払って見ないか？　金なら貸すぜ」

「いいや、遠慮しとくよ。　剣の取引で金を減らすなんて馬鹿らしいからな」

「そうかい」

俺としては、キリトの剣を買取たい奴の少し興味があったんだがな。

まあ、それでも俺が本腰を入れてまで知りたい訳じゃないし、第一俺が知ったところでほとんど意味がない。

「まったく、情報を売らないほうでも商売するなんてよ。　恐れ入るぜ」

「それがこの商売の醍醐味だナ！　誰かに情報を売ると、その瞬間に《誰それがなになに

の情報を買った》ていうネタが生まれるわけだからナー」

現実では客の名前を明かすってのは犯罪に当たるわけだが、この世界はゲームなのでそういうのは一切適用されない。

つまり、彼女の客になる＝名を売られてしまう。

ということになるのだ。

その代わり彼女の情報屋としての腕は超一流なので、文句のつけ所がない。

「まあ、どっかの女性プレイヤーが俺の情報を買った時は教えてくれ。　相手の情報全部買うから」

ため息混じりにキリトが言う。

「お！　そんじゃあ、俺も頼むわ」

俺もそれに同調し、アルゴに頼むと彼女は愉快そうな笑い声を上げてから表情を改めた。

「んじゃ、依頼人には今度も断られたって言っておくサ。　この交渉は無理筋だ、ともナ。　ほんじゃまたな、キリ坊、シン坊」

ひらっと手を振り、身を振り返す。

だが、彼女はそこで何かを思い出したかのように立ち止まり、再びこちらを向くと

「さっきの話しなんだが、多分、シン坊の情報は売れないと思うゾ」

「は？　今それ言うかフツー!?」

「そんじゃナ～」

アルゴは、敏捷さをフルに使って表通りへと走っていった。

「ちくしょ～。　いつか仕返ししてやる」

拳をワナワナ震わせながら、密かに誓う。
そんな俺をよそにキリトはデジタルタイマーを見ていた。
「そろそろ会議の時刻も近いし、飯にしないか？」
キリトの言葉を聞いてか、俺の腹が空腹を訴える。
考えてみりゃー、まだ昼飯食ってないな。
「よし、今日はレストランでも行ってガツガツ食おうぜ!!」
キリトと無理矢理肩を組み、俺達は表通りへと足を進めた。

第一層攻略会議

「ん、あれは？」

アルゴと別れ、レストランに向かう途中に通った噴水広場のベンチに見知った少女がいた。

さっきまで俺たちと一緒に行動していたレイピア使いの少女。

彼女は一番片隅の方で黒パンを食べている。

レイピア使いの食べているあの黒パンは、この町では最も安い食べ物で、ある工夫をしなければお世辞にも美味しいとは言えない。

それを食べているってことは、金が無いかもしくは倹約家のどっちかだ。

前者は無いな。

数日間もダンジョンに潜ってた奴が、金に困るなんておかしい。

後者は……。

ありえそうだが、多分違う。

と、すると残りは心情的な問題か。

どれにしても、彼女がこんな所で一人で黒パン食ってるのを見て、俺達だけでレストラン。

ってのもな～。

と、思いながらキリトの方を見ると、意外にもキリトもこちらを向いていた。

その顔つきから、どうやら考えていることは同じらしい。

俺はわざとらしく、咳払いをして

「あーあー。　なんだか急に黒パンが食べたくなったな。　キリトはどう思う？」

「奇遇だな。　俺も丁度食べたいと思ってたんだ」

わざとらしく会話した。

それから俺たちは近くのベーカリーでパンを買い、彼女の元へと向かった。

彼女の元へ行くと、俺たちに気づいたのか鋭い眼差しをこちらに向けた。

毎度、毎度突き刺さりそうなぐらいの眼力だが、流石に少しは慣れた。

「隣、大丈夫か？」

意を決して、声をかけてみる。
すると、意外は彼女にも頷いてくれた。
予想ではバッサリ切られるか、（「精神的に」）もしくは黙ってそこから立ち去ってしまうかもしれないと思っていたため、少し安心した。
ベンチには、レイピア使いの隣にキリト、その隣に俺と言った順番になった。
なんだか、少々俺的に席順は残念だが、まあいいか。
俺とキリトは同時に黒パンポケットから出す。
と、――――――

「それ、美味しいと思ってるの？」

俺の隣からレイピア使いの声がした。

「え？　ああ、パンのことか。　もちろん美味しいぜ。　なあ、キリト！」
「まあな。　ちょい工夫をするけど」
「工夫……？」

意味がよく分からないのか、レイピア使いは首をかしげる。
そんな彼女にキリトはポケットから素焼きのツボのようなものを取り出し、レイピア使いの横に置いた。

「そのパンに使ってみろよ」

キリトの言葉にレイピア使いは一瞬はかりかねている様子だったが、意味に気づいたのか、ぎこちない手つきで操作をして、ツボを《パンに使った》。
すると、先程までのなんの変哲もないパンの上にゴッテリと白いクリームが塗られた。

「これは……　クリーム？」
「その通り！　一個前の村で受けられる《逆襲の雌牛》っつうクエの報酬で、クリアに時間かかるは、牛型モンスターに吹っ飛ばされるはで、あんましやる奴はいねーからある意味中々レアなんだぜ」
「……へぇ～」

レイピア使いがクリームの塗られたパンをまじまじと見ている間に、俺とキリトもパンにクリーム使った。
そして、それで内容量が切れ、ツボは二つとも光となって消えた。

「いただきます!!」

手を合わせ、ご飯前の挨拶をし、一気にパンを貪る。
口の中に程よく、それと言ってしつこくない甘さと、さっぱりとした酸味が広がる。
気づくと黒パンは一分も経たない内に、その形をなくしていた。
ふと横を見ると、キリトも同時に食べ終わったらしく、レイピア使いに至っては俺たちよりも早くに食べ終わっていたようだ。

「……ごちそうさま」

レイピア使いは小さい声でつぶやき、お礼を言った。
それに対し、キリトも「どういたしまして」と答えた。
どうやら食事を一緒に取ったことで、俺とキリトの認識を少し変えたみたいだ。

「ごちそうさま!」

俺もレイピア使いの後に続き食事終わりの挨拶をし、立ち上がって中央広場の方を見る。

そこには既に多くのプレイヤーが集まっており、《会議》の時間も、あと五分後という所だ。

「そんじゃあ、行きましょうぜ」

俺の言葉と共に、レイピア使いとキリトも立ち上がり、中央広場へと向かった。

□　　□　　□　　□

ざっと四十五人。

これがいまこの場にいるプレイヤーの総数だ。

人数、的には十分とは言えないが、これだけいればまあなんとかなるか。
それからしばらくすると、広場の中央に長身の青髪の男が現れた。
パット見で装備など見るに、かなりの実力者か。

「はーい！　それじゃあ、そろそろ始めさせてもらいます!!」

青髪の青年は大きく広場中に届く声で、叫んでいる。
それに対し、集まった一部のプレイヤーはざわめいている。
うん、気持ちは分かる。
恐らくなんでこんなイケメンが、ここにいるかという事で騒いでいるんだろう。
茅場のせいで、全プレイヤーは現実の姿に戻され、ファンタジーのような美男美女の奴はほとんどいなくなった。
それが、現実の姿に戻されて尚、イケメンだと？
ふざけるなあああ。
俺には分かるぞ。
この青髪に対する、みんなの怒りと嫉妬が。

「いや、多分違うと思うぞ」
「えっ、マジで!?　というか、なんで俺の心の声聞こえてんの？」
「顔の表情で分かった」

おい、キリト。
顔の表情で分かったっておい。
俺はどんだけ分かり易い奴なんだよ、とツッコミを入れようと思ったと同時に青髪の青年が再び上げた叫び声により打ち消された。

「今日は、オレの呼びかけに応じてくれてありがとう！　知っている人もいると思うけど、改めて自己紹介しとくな！　オレは《ディアベル》、職業は気持ち的に《ナイト》やってます！」

ディアベル。
それが俺たち最前線プレイヤーを集めた男の名前だった。
俺の記憶では昔のアインクラッドでは少なくとも聞いたことのない名前。
とりあえず今の時点では、ディアベルが元βテスターの可能性は薄いか。

つか、今頃だけどナイトってなんだよ。

「みんなに集まってもらったのは他でもない。　今日、オレ達のパーティーがあの塔の最上階へと続く道を発見した!!」

ディアベルの発言に、プレイヤーの殆どへと衝撃が走った。

もちろん俺やキリトにもだ。

俺達が今日潜っていたのが（あと、レイピア使い）、十八から十九階だったので、まさかもうそこまでマッピングされてたとはな。

「ここまで来るのに一ヶ月かかった。　それでも、オレたちは示さなきゃならない。このデスゲームをクリアできるってことを。　第一層の《始まりの町》にいるみんなに!!　ここにいるオレ達が!!」

湧き上がるのはここに居るプレイヤーの喝采。

今度はディアベルの仲間以外も拍手を送っている。

そして俺もその一人だ。

「よく言ったぜ、ディアベル!!　それでこそ騎士ナイトだぜ!!」

気づいたら先程までの怒りはなく、代わりにディアベルを褒め称える声を連発していた。

この人ならこれからの攻略も指揮を任せられる。

そう思っていた時だった。

「ちょお待ってんか、ナイトはん」

低い声がした。

見ると、空隙の中央にたっていたのは小柄ながらがっしりとしたサボテン……。

失敬、サボテンみたいな髪型の男性だった。

「そん前に、こいつだけは言わへんと、仲間ごっこはできへんな」

唐突な乱入にだったが、ディアベルはほとんど表情を変えずに、まずは名前を名乗る

よう言った。
すると、サボテンのような髪型をした男性は広場中央へと行き、口を開いた。
「わいは《キバオウ》ってもんや」
キバオウと名乗るプレイヤーは周り一体を見渡しながら、こちらの方を見て一瞬目を止めた。
ってのは、気のせいか。
こんな奴、俺は会ったことねぇし、名前も聞いたことがない。
キバオウは、十分にプレイヤー達を見渡すと、衝撃的な事を言い放った。
「こん中に、五人か十人、ワビぃいれなあかん奴らがいるはずやで」
キバオウの言葉に、この場のプレイヤー全員に動揺が走る。
嫌な予感がする。
そして、その予感は、ディアベルがキバオウに対して「誰にだい？」と質問したことにより、見事的中してしまった。

「決まっとるやろ。　今までに死んでいった二千人にや!!　奴らがなんもかんも独り占めしたせいで、一ヶ月で何千にも死んだんや!　せやろが!!」

キバオウの発言に、四十人のざわめきが一斉に止まった。

恐らくみんなが、キバオウが一体何を言いたいのかを理解したからだろう。

そう、彼が言う《奴ら》とは誰なのかを。

「ベータ上がり共は、このクソゲームが始まったと同時に九千のビギナー達を見捨てて、始まりの町から消えおった。　こん中にもおるはずやで、そんな奴らが。　そいつらに土下座させて、溜め込んだ金やアイテムを軒並み吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし、預かれんとそう言うとるんや」

キバオウの演説が終わっても、誰も口を開くものは居なかった。

多分だが、この中にβテスターはいるだろう。

俺やキリトみたいに。

だが、それでも誰もキバオウに対し無言を決めているのは、自分がβテスターだと知

られたくないからだ。
キバオウの行った通りβテスターのほとんどは、デスゲームが始まると同時に行動に移した。
その為、ビギナーの多くは始まりの町に取り残され、僅かに外に出たもののほとんどがソードスキルの使い方さえも知らぬまま死んでいったと聞いた。
その事を恨んでいるプレイヤーは少なからずキバオウの他にもいるはずだ。
下手したら、βテスターだというだけで吊るし上げに合う可能性だってある。
それを恐れてみんな心の叫びを必死に抑えているのだろう。
俺としても、あの時に真っ先に町を出て、ビギナー達を結果として見捨てた事に言い訳をするつもりはない。
むしろ、俺たち(βテスター)にそんなことを言う権利なんてないのかもしれない。
だが、――――――――

「ちょっと待てよ」

俺は、立ち上がってキバオウに対し意義を唱えた。
それまで沈黙だった会場が、一気にざわめく。

「なんや、あんた。　なんか文句でもあるって顔やな」

「ああ、大ありだぜ。　キバオウさん」

この日、初めての攻略会議はこうして波乱を呼んだ。

攻略戦の前夜

二千人。

これがこれまでにＳＡＯこの世界で死んだプレイヤーの数と言われている。

そしてアルゴの調べではその中の約三百人が、βテスターの死亡数であるらしい。

βテスターの募集枠は僅か千人。

流石に全員がこのゲームに参加している訳は無いので、その中の七割、八割が実際に参加しているプレイヤーだろう。

これらの情報を照らし合わせると、元βテスターの死亡者数の割合は四十％。

ほぼ、半分に近い数のβテスターが死んだということになる。

もちろん、この情報が正確だという確証はない。

だが、俺はこの情報を、アルゴの情報屋としての腕を信じている。

だからこそ、俺はこの情報を《真実》として受け止めた。

《真実》と受け止めたからこそ、俺はキバオウの言ったことが許せなかった。

「まず初めに名乗らせてもらうぜ。　俺の名前はシンジだ。」

自己紹介しながら、一旦登った熱を冷やす。
俺は熱くなりやすいタイプだ。
このまま、何か言おうとしてもただの暴言になってしまう。
それではだめだ。
そんな事をすれば、そこに付け込んで、キバオウはますますβテスター達の印象を悪くするだろう。
まずは冷静クールになれ。

「キバオウさん、あんたはつまり、二千人もの大勢のプレイヤーが死んだのはβテスターのせい、だと言いたいんだよな？」
「せや、あいつら見捨てなかったら今頃ここにたくさんのプレイヤーがおったはずやで。他のＶＲＭＭＯでトップ張ってたベテランたちがなあ！　こないことなったのも、アホテスター共が情報やら金やらアイテムやらを分け合わなかったせいや!!」

勝手な事ばかり言うなよ。
確かに俺を含めた多数のβテスターは、結果的にビギナーを見捨てた。

それは変えようのない事実であり、許されないことだというのは俺だって分かってるだけど、そのβテスターだって被害者なんだ。
命の危険があるのは俺たちだって同じなんだ。
それが分からない奴にβテスターの事をとやかく言われる筋合いはない。

「あんた、勘違いしてるぜ？　金やアイテムはさておき、情報はあった!!」

腰に付けたポーチから一冊の本を取り出し、広場全体に見えるように高く掲げた。
その本の表紙には《鼠マーク》が描かれている。

「もらってない、って事はないよな？　なんせ、こいつは至る道具屋で無料で手に入るものなんだからよ」
「無料!?」

俺の真横で驚きの声が聞こえた。
……キリト、お前知らなかったのかよ？
ツッコミたかったが、今は目の前の事に集中しよう。

「こいつはここに居るみんなが知っているように《エリア攻略本》だ。　この本には様々な攻略情報が載っている。　ここ、第一層のな。　しかも、情報が流れるのが異様に速い」
「せやからなんや。　何が言うたいんじゃ!!」
「まだ分かんねえのか。　つまり、本の作者に情報を流したのはβテスターだってことだ!!」
「くっ!!」

ようやくキバオウは口を閉じた。
キバオウの主張は「βテスターがビギナー達に対し、何もしなかったせいで大勢死んだ」というものだ。
しかし、今の俺の話で多少なりにもβテスターはビギナー達を気にかけていたということが証明できた。（もちろん根本的なことは変わらないが）
これで、なんとか最悪の状況にはならなそうだ。
そう思っていたが、甘かったらしい。
キバオウの次の発言で状況はまたも一変する。

「そないこと言う、おまはんこそがβテスターちゃうんか？」

キバオウの言葉の牙が俺に突き刺さる。
この言葉こそ、この場に居る元βテスターが最も恐れるものである。
なぜ、βテスターをそこまで庇護するのか？
それは、お前がβテスターだからだ。
と、言う調子で有無を言わさず仕立て上げられることとなる。
まあ、実際その通りなんだがな。
だが、今は自分がβテスターであることを宣言するわけにはいかない。
理由はキリトとレイピア使いだ。
よくよく考えてみたら俺が今正体をバラしたら、一緒に居たこいつらまで巻き添えを喰らう可能性がある。
行動を起こしたのは俺だ。
二人を巻き込んでいいわけがない。
とは言ったものの、なんて言い返せばいい。

「どうしたんや。　さっきまでの威勢がなくなっとるで？」
「うっ……」

やばい、考えろ。
なんかいい誤魔化せそうな言葉を。
必死に頭の中で言葉を模索していると、一人の男性が手を上げていることに気がつく。

「発言いいか？」

立ち上がった男性は二百はあるだろうか、大きな体をしていた。
色は黒く、頭は見事なスキンヘッド。
背中に背負っている斧も実に似合っている。
だけど、何故いまこのタイミングに発言を？

「オレの名前はエギルだ。　そうそうで悪いが、一つだけ言わせて欲しい」

そう言うと、エギルは俺とキバオウの方を向く。
この男は一体何を言うつもりのか。
思った瞬間、

「こんな時にあんた達は何を言い争っているんだ!!」

広場、いや、アインクラッド全域にに響き渡る怒声をエギルは発した。
俺とキバオウは唖然とした。
多分、他のプレイヤー達も。

「今はそんな事している場合じゃないだろ。　この会議は「これからオレ達がどうするか」を決めるためのもののはずだ。　ケンカをするならよそでやってくれ」

最後に「発言を終える」と言い、エギルは静かにその巨体を席に沈めた。
しばらく時が止まったが如く、誰も何もしようとしなかったが、

「キバオウさん、シンジ君。　君たちの言いたいことはどちらも理解できる。　でも、今

はエギルさんの言う通り仲間割れをしている場合じゃ無いと思うんだ。　それぞれ思う所があるかもしれないけど、今は目の前のボス戦に専念しよう。　できない人は申し訳ないけど、このチームから抜けて欲しい」

ナイト様はこちらをじっと見ながら言った。

それに対し、キバオウも納得はしてないものの、今は自分に分が悪いと考えたらしく、素直に自分の元居た席に戻った。

――――――俺を睨みながら。

でもまあ、キバオウが引っ込めば、俺もいう事はない。

空気に合わせて、俺も座ろう。

安堵のため息を吐きながら腰掛けると、横からすごい視線が送られてくる。

……キリトか。

「シンジ、お前――――――」

「悪ぃ、今はその話は無しにしてくれ。」

「……分かった」

小声で会話を一旦終わらし、キリトには悪いことをしたと思いつつ頭を切り替えて会議に専念した。
それからの会議はスムーズに進み、パーティメンバー編成の時もすぐに決まった。
俺のチームのメンバーはキリトと何故かレイピア使い。（レイピア使いは多分知り合い居なさそうだから、アブれたんだろうな）
ちなみにパーティーを組んだ際に分かったのだが、レイピア使いの名は《アスナ》と言うらしい。
まあ、名前で呼び合うほど親しくないから知っていてもあまり意味がない気がする。
その後は作戦のことを色々と説明され、明日のボス攻略のために早めの解散となった。

□　　□　　□　　□

今の状況を分かりやすく言おう。
スゲー気まずい。
ボスの攻略会議が終わった後、作戦の最終確認をキリトの部屋でやろうと言う話になった。

のだがここに風呂があるということに気づいたレイピア使いが、目の色を変えてキリトに半ば強引に頼み込み現在彼女は入浴中である。
そのため、俺とキリトは二人でレイピア使いが上がるのを待っているんだが……。
チラッ、とキリトの方を見る。
例の分厚い攻略本を読んでいるが、明らかに様子がおかしい。
妙にソワソワしてるし、何か別なことに気を取られているような感じだ。
そして、それは俺も同じだ。
アイテムの整理をしているが、どうも身が入らない。
恐らく俺とキリトが気を取られているのは同じことだ。
そう、第一層ボス攻略会議の時の。
俺が勝手な行動をしたことについての追求だろう。
当たり前だよな。
間接的とは言え、危険に晒してしまったんだから。
どう謝まったらいいのか正直分からないが、とにかくキリトとちゃんと話すべきだよな。
後、レイピア使いにも。
脳内で考えがまとまり、早速行動に移そうとしたとき。

扉からコン、コココンと言うノックの音が聞こえてきた。

「この音は……」

俺とキリトとアルゴで決めた合図。
キリトはここにいるので除外したとして、残りはアルゴ。
ということはドアの前に居るのは――――ハッ!!
目線を素早くバスルームの扉に向けた。
キリトもまた、俺と同じ考えに至ったのか見ている所は一緒だった。
あの扉の向こうでは今、レイピア使いが入浴している。
それがもし一流の情報屋であるアルゴにバレてみろ。
すぐさまネタにされて、俺たちの人生（社会的に）ＤＥＡＤＥＮＤ直行だ。

「ど、どうするキリト?」
「落ち着け！　ＳＡＯでは、ドア越しの音は聞こえない。つまり、この部屋にアルゴを入れても問題はないはずだ」
「レイピア使いが出てきたら?」

「……その時は逃げよう」
「うぉーい!!」

コン、コココン。
尚も鳴り響くノック音。
流石にそろそろでなければ、何か在ると怪しまれる
そうなったらこの手については猟犬並の鼻を持つ彼女を欺くことは不可能。
これはもう行くしかない。

「開けるぞ」

キリトに確認をとり、頷いたのを見て俺は扉を開けた。

「よぉアルゴじゃんかよ。ドウシタンダ?」
「いや、それはこっちの台詞だナ。なんかあったカ?」

くっ、話してそうそう怪しまれた。

流石アルゴ、鼻が利きやがる。
だが、まだバレた訳じゃない。
ここから話をずらせばいいだけだ。

「中にハイレヨ。ドーセキリトの事だろ？」
「まあナ。それじゃあ、上がらせてもらうヨ」

平然と部屋の中に入ると、アルゴは手近なソファに腰掛ける。
それと気のせいかキリトがため息をついているところが見えた。
いや、俺頑張ったし。
充分やったと思うよ、俺。
そう思いながら俺はドアを閉め、近くの椅子に座った。

「さて、これは俺の予感なんだが。またキリトの剣を買取りたいって奴の依頼だろ？」
「おっ！　正解ダ。シン坊は妙なところで勘がいいナ」
「よせよ照れるぜ!!」
「シンジ、褒められてないぞ」

「マジで!?」
「まあ、そこは置いといてでナ。そろそろ本題に入らせてもらうゾ」

コホン、と咳払いをして場を仕切りなおしてからアルゴは口を開いた。

「キー坊の剣、今日中なら三万九千八百コルだすそーダ」
「……さ!?……」
「ちょい待てアルゴ。そりゃあ、少しばかり怪しくないか?」

あまりの金額に言葉を失っているキリトはさておき、いくらキリトが持っているアニールブレードが高性能と言えど、それだけの金があればこれと同等、もしくは上回る性能のモノが作れるはずだ。
なのに何故、わざわざそこまでしてキリトの剣を欲しがるんだ。
「オレッちも散々言ったんだけどナ。どうしてもってきかないんダ」

両手を上げたって事は、理由はアルゴも知らないのか。

だとすると、本格的に分からないな。
大体メリットよりもデメリットの方が多い取引なんて聞いたことないぞ。
……待てよ、この取引によって起こるメリットやデメリットってのはそもそもなんだ？
依頼者の場合、メリットはアニールブレードの入手。
逆にデメリットはそれに払う定価以上の金。
キリトのメリットは本来の売値よりも多くの金を入手とデメリットは……戦力の低下ぐらいか。
まあ、キリトだって予備の剣ぐらいは持ってるだろうけど、今の装備には及ばないだろうしな。
そうなれば本来よりも弱くなるのは当然……ん？
弱くなる？
オイオイ、ちょっと待てよ。
いままで依頼者のデメリットとキリトのメリットがでかすぎて見えなかったけど、依頼者の方にはもう一つメリットが、キリトにはもう一つデメリットがあった。
そう考えるとキリトの剣を執拗に欲しがっていたのは、使いたいからではなくキリトの戦力を低下させるのが目的か。

だが、それに一体何の意味があるんだ？
まだだ、まだ何かあるはずだ。
……もしかすると期限か
確か依頼者は今日中限定で、この金額と言っていた。
と言うことは今日までに手に入れなければならない理由がある。
それは何か。
明日あるのはボス攻略だ。
だとすると依頼人はボス攻略会議に出席していた誰かという可能性が高い。
しかし、だったら味方を弱くしてどうするんだ。
それもよりにもよってボス攻略の日に。
もしやそこに何かまた別のメリットがあるのか？
いくつもの考えが頭に浮かぶが、まだ全てがつながらない。
――――――そうすると、残る手がかりは。

「キリト、俺も金払うからクライアント様の名前調べようぜ。興味がでてきた」
「ああ、俺も丁度そう思っていたところだ。アルゴ、頼めるか？」
「……わかっタ」

アルゴは頷くと、素早くインスタントメッセージを作成、そして飛ばした。
それから一分後、返事が来たのか彼女は肩をすくめた。

「教えて構わないそうだ」
「ん、随分とあっさり解決したな」

てっきり徹底抗戦になるかと思ったんだけどな。
余計な心配だったらしい。
俺とキリトは互いにコインをオブジェクト化し、アルゴの目の前に置いた。
それを一枚ずつアルゴはストレージに格納し、最後の一枚を入れ終わると同時に言った。

「キー坊とシン坊はもう、そいつの顔と名前を知っているヨ。特にシン坊はネ。今日の会議で二人で大暴れしてたしたからナ」
「……冗談だろ？」
「……まさか……キバオウ、か」

キリトの囁きにアルゴは、はっきり頷いた。
間違いはないという訳か。
ここまで来て、まさかコイツの名前が出てくるとはな。
嫌なイレギュラーだよ、まったく。
おかげでますます混乱してきたぜ。
まあ、その代わり一つだけ分かったこともあるが。

「この取引はやめたほうがいいぜ。あいつは何してくるか分からねーからな」

触らぬ神に祟りなし。
キバオウと言う男は今日の攻略会議を見るあたりどうも信用ならない。
それに相手の真意が分からん以上、手を出すのは危険だ。

「それじゃあ、剣の取引は不採用でいいんだナ？」
「……ああ」

心がこもってない返事でキリトは返したが、よほど驚いたらしい。
しばらくはこのまんまだな。

「そんじゃ、オレっちはこれで失礼するヨ。二人共、明日頑張ってくレ」
「おう、任せとけ」
「ああ……」
「っと、その前に悪いけどとなりの部屋借りるゾ。夜用装備に着替えたいカラ」
「どぞ、俺のへやじゃねえーけど」
「ああ……」

さて、どうしたものか。
名前を知ったら、逆に謎が深まっちまった。
一体どうしたものか。
……ちょっと待て。
その前に俺、まだキリトと今日の事謝ってないじゃん。
アルゴが来てバタバタしてたからすっかり忘れてた。
しまった、今すぐ謝らなければ。

そう思い、キリトの方を向くと――――。
何故かカッチコチに固まっている
その様子はまさに蛇に睨まれたカエルに等しい。
何を見て固まったのか気になり、視線の先を見てみると
――――アルゴがバスルームの扉の中に入っていったところだった。
サァー、と血が引いていくのが分かった。
その数秒後、二つの叫び声が聞こえた。
ひとつは驚声、もう一つは悲鳴が。
とっさに俺とキリトは窓から逃げようとしたが遅かった。
直後、ドアから飛び出してくるプレイヤー。
それはアルゴではなく――――。
今、思えば彼女をちゃんと見たのはこの時が最初かもしれない。
透き通りそうな程の白い肌、よく手入れされている栗色のロングヘアー、そして今起こった状況を理解し、りんごのように赤くなった顔。
それを見て、俺とキリトは、

「女神だ」

「ああ、モノホンの女神様が降臨なされた」

「ばっ、ばかあああああああ!!」

悲鳴が聞こえたと思ったら、意識は既になくなっていた。

栄光と死のロード

噴水広場に集まった四十五人のプレイヤー達。
彼らは現時点で見るに、この世界ＳＡＯでの最高戦力であり、もっと言えば自力でここから脱出するための唯一の希望とも言えるだろう。
しかし反面もしもこのメンバーが全滅、あるいは多数の死亡者により攻略を断念したときに希望は絶望へと変わる。
これだけの戦力を揃えて、第一層のボスすら倒せない。
そうなってしまえば噂はすぐに広がり、一気にはじまりの街から外に出るプレイヤーは少なくなる。
果たして次の攻略部隊の戦力はどうなるか。考えるまでもない。
だからこそ今回の戦いでは絶対に負けられないし、被害も出させない。
俺たちは次につなげるための《希望の道》になるんだ!!
と、心を熱くするような見事な演説をしている騎士様を尻目に俺は別な方向へと視線を持ってかれていた。

その方向に居るのはフードに素顔を隠された女神――――――――。

「……何見てるの、あなた達？」

とは言えないような鋭い目つきでこちらを睨み返す。

それも、小さくも胸元を抉るようなささやき声もセットで。

「い、いやー、今日は天気がいいな～」

「そうだな！　雲一つない、いい天気だよな!!」

咄嗟に嘘くさいごまかしをした俺たちに、レイピア使いは何も言わず、後ろ向いてしまう。

その様子から彼女は明らかに不機嫌であり、その理由を思い出そうとすると別な意味でキリト共にこの世界からオサラバしてしまうので何も思い出すことはできない。永遠に。

つか、大丈夫なのかこのパーティ。いくらサポート重視だからって、こう変な空気だと色々と危ない気がするんだが。

「おい」

聞き覚えのある、低い声が聞こえたので後ろを向く。
目の前に居たのは茶色の短髪で、さらにその髪を逆立てることにより完済されるサボテンヘアーの男性プレイヤー。
俺が今最も警戒している人物、キバオウが立っていた。

「……何か用ですか、キバオウさん」
「ひとつジブンらに言うとこうと思うてな。ええか、今日はずっと引っ込んどれよ」

キバオウはこちらに憎悪をでも込めているかのような目でこちらを見ながら言い放った。
よほど、昨日の事が頭にきているらしい。
まあ、俺も人のこと言える立場じゃないけどな。
元βテスターの件といい、キリトとの取引の事といい。
明らかになにかしろ因縁をつけてきているのは間違いない。

「大人しく雑魚コボルトの相手でもしとれや」

そう吐き捨てると、キバオウは唾を吐いて身を翻し、味方のEパーティーの方へと歩いて行った。

「……何よ、あれ」

途端、となりで声が響く。

声の方向を見るとレイピア使いが先ほど向けてきた視線の倍ぐらい恐い。

もはや、目を合わせるだけで心がボロボロになりそうだ。

……でも、気持ちは分かる。

あれだけ馬鹿にされりゃあ、誰だって怒るさ。ただ、今は攻略戦前だと言うことは忘れてはいけない。

ここで、場の雰囲気を壊すのは戦闘にも支障をきたす恐れがある。

「まあまあ、そう怒んなさんなって。なあ、キリト」

「……」

レイピア使いの怒りを鎮めるためにキリトに協力を促す。
が、まさかの無反応。

「おーい、キリト」

再度声を掛けるが、またも無反応。
それどころか視線さえ、固定したまま動こうとさえしない。
流石に心配になり、三度目に声を上げようとした時――

「……え？　ああ、悪い。少し考えことしてた」
「考えごとって。一体何を――――」

俺の言葉は途中でより大きな声によって遮られた。
声の主はさっきまで熱い演説をしていた、青髪の騎士ディアベル。様子からしてどうやら今日の攻略に参加するプレイヤーが全員集まったようだ。

「みんないきなりだけど一言言わせてもらうよ。ありがとう！　誰ひとり欠けることなく此処に集まってくれてオレ、スゲー嬉しい！　この調子でボス戦も死亡者無しで闘いぬこう!!」

言葉を終えると、剣を抜いて天高くそれを掲げた。

「オレ達がこれから切り開くのは《希望の道》だ。その一歩を踏み出す為にこの戦い絶対に勝とうぜ!!」

高らかに叫びディアベルに対し、会場の声はそれを倍にして沸き上がった。

□　□　□　□

何と言うか、こりゃあ流石に浮かれすぎだろうよ。

ボスの間に向かう道中、俺はてっきり無言で行くものだとばかり思っていた。これか

ら戦う相手はフロアボスの中で最弱に属し、このメンツならば楽勝とまでは言わなくても無難に勝てる相手だ。

しかしそれでも強さはそこら辺のモンスターとは次元が違う訳で、油断すればあっさりあの世行きってことも十分にありえる。

だってのに右や左からも笑い声の嵐。途中、モンスターと出くわしても連携を取るどころか我先へと攻撃する有様。

緊張しすぎってのも困るとこだが、これは気を抜きすぎだろ。

そんなことを考えていると、となりのフードを被った少女がこちらに近づいてきた。

「……ねえ、あなた達ってここに来る前もエ……ＭＭＯゲームをやっていたんでしょ？」

「ん、ああ、まあね」

「同じく、ってところだな」

少し意外だ。アスナ、いや、レイピア使いの方から声を掛けてくれるだなんて思っても見なかった。なにか疑問に感じたことでもあるのか。

「他のゲームも移動の時ってこんな風だったの？」

なるほど、彼女が疑問に感じていたのは今の雰囲気か。確かに、これから正に命懸けの戦いをするってのに今のこんな状態を見たらそう思うな。

「俺はＦＰＳ（ファーストパーソン・シューティングゲーム）系を主にやってたからよく分からいけど、少し前にやってたのではここまで賑やかではなかったな」

ただ、その少しやってた奴ってのはＳＡＯのベータ版だけどな。

「キリト、お前の方は？」

「んー、俺の方も大体シンジと同じかな。賑わってた所はそうだったし、そうでない所もあった」

「ふ～ん」

レイピア使いは各々の質問の答えを聞くと、何か考えているような動作を見せながらまたも口を開いた。

「本物は……どうなのかしら」
「へ？　本物？」
「仮にファンタジーのみたいな世界が実際にあったとして、これから怪物に立ち向かおうと考えている剣士たち一団はどんな風なのかって話」

質問の意味が分からなかったキリトに、レイピア使いが詳しく説明した。まあ、正直俺も分からなかったが。

多分だが、彼女は今のこの攻略部隊とファンタジー世界の冒険者集団と重ねているのだろう。

言われてみればそうかもしれない。状況にいくつかの違いがあるが、どちらも《命》を掛けているのに違いない。そう考えてしまえば今の状況は正にそうだ。

「――――死か栄光への道行、か」

唐突にキリトの声が耳に届いた。

「それを日常としている人たちなら……多分、黙るもしゃべるもその人次第だと思う。

今はちょっと気が抜けてるみたいだけど、いずれはこのボス攻略組もそうなるんだと思う。このまま順調にいけばね」

「……確かにな。俺もそうだと思うぜ。」

道中、何をしようとも結局はその人の勝手だ。例えば今日みたいに少々浮き立つ人がいれば、進むごとに何も喋らなくなる人、作戦の確認をする人等色々出てくるはずである。

今回の場合は初めてということもあり、多分あまり実感が沸かないがためのこのお祭り騒ぎ。もしくは恐怖を隠すためのものだろうか。

キリトの言う通り、これが日常と同じになってしまえばきっとみんな変わるのだろう。ただ――――

「考えには同調するけど、お前その台詞完全中二病だぞ」

「え、そうかな？」

「スゲー鳥肌立ったわ」

分かり易い説明だったのは認めるが、普通に聞けばただの中二病の痛い人である。

「まあ、キリトもまだまだガキってことだな」
「なっ！　そういうシンジだって前に『さあ！　狩りの始まりだぜ!!　レッツパーリ!!!!』とか言ってたって聞いたぞ」
「グハッ!!　お、お前それは一時の気の迷いという言うか何と言うかだな。……つか、誰に聞いた？」
「アルゴが面白い小話があるぞって言ってきて五コルで買った」
「あの野郎おおおおおおおお」

どおりでここ最近知り合いと会う度に笑われてると思ったらそういうわけか。しかも五コルっておい。黒パンとほぼ同価格じゃねーかよ。アレか、俺の社会的立場は黒パンと同格なのか？
頭を抱えながらも、メニューを開いて残金を確認。情報屋のアルゴの口を塞ぐには、買うのと同じく口止め料を払う以外方法はない。
つい最近も、と言うより昨日の出来事を黙っててもらうために多額のコルを支払ったばかりであり、現在の俺の懐は氷河期を迎えている。
……うん、全然足りないな。今日頑張ろう。

「ふ、ふふふ」

ふと、小さな笑い声に気づいた。

「笑ってごめんなさい。でも、あなた達のやり取りが面白くて」

そう言いながら、レイピア使いはまた何かを思い出しかのように笑い声を上げた。

恐らく、彼女の笑ったところを見るのは今のが初めてだろう。最初に出会った時なんかは妙に刺々しいものがあったが、どうやらあれから少しは距離が縮まったようだ。

――――なんとなく、俺はそれが嬉しかった

□　　□　　□　　□

「着いたぞ」

迷宮内にディアベルの声が響く。

現在、目の前に見えているのは巨大な二枚扉、《ボスの間》への入口である。

この先に待ち構えているのはカテゴリー《斧》を扱う獣人の王《イルファング・ザ・コボルドロード》とその配下の三匹の斧槍ハルバート使いの《ルインコボルド・センチネル》。

注意すべき点はまず、彼ら亜人型はプレイヤーが扱うソードスキルを発動することができること。この世界の必殺技とさえ言われるこの《剣技》の威力は今まで行ってきた戦闘で十分に理解できるはずだ。

それに加え、今回の攻略戦の最難関とも言えるのがコボルド王の武器交換（ウェポンチェンジ）。

奴のＨＰバーを最後の一本にするとそれまで使用していた武器を捨て去り、腰から巨大な湾刀（曲刀）を取り出して今までとは全く違う攻撃パターンで襲い掛かってくるのだ。

もちろん攻略本にはも一寸違わずそれに対する攻略パターンも記述されているわけだが、やはり読むのと実際にやるのとでは大きく差がある。

今回の勝利の鍵はいかに速く攻撃パターンの切り替えに適応できるか、と言ったとしても過言じゃない。

ワケなんだが、残念なことに今回俺たちのパーティーはボスとは接触せずに他の隊のサポートに回り、主に《センチネル》と戦うことになっているためこの知識が生かされることはない。

「はぁ～、なんか少しボスと戦えないことについて残念な気がするのは俺だけか？」
「しょうがないだろ。人数の関係で他よりも人数少ないんだからな。それよりも作戦の最終確認だ」
「へいへい」

本体から少し離れたところに移動し互いに身を寄せ合いながら、キリトが今日のパーティー内作戦の確認について口を開いた。

「まず、俺が《センチネル》のタゲを取って引き付ける。次にスイッチでシンジがソードスキルで相手をダウンさせ、最後にフェンサーさんは再度スイッチで《リニアー》を放ってくれ」
「了解」
「分かったわ」

俺とレイピア使いは同時に頷いた。

「敵は取り巻き達で雑魚扱いだけど、充分強力な敵だ。あんたの《リニアー》は凄いけど、多分貫ける場所は喉元だけだと思うから注意してくれ」

キリトは最後にもう一度攻撃する場所を確認して正面を向いた。それに釣られるように俺も前に姿勢を直した。既に扉は半分位開かれており、あと数十秒もすれば完全に解放されるだろう。

「――――行くぞ！」

短くディアベルが叫び、まだ開きかかっているドアを押し開けた。

――――その瞬間こそが第一層ボス攻略戦開始の合図となった

獣人の王

《ボスの間》に足を踏み入れるとそこは辺り一面暗闇に染まっており、前方をまともに視認することさえ叶わない。まったくもってベータテストの時と一緒だ。

部屋の構造も左右の壁の幅も、恐らくは扉から奥の壁までのとてつもなく長い距離も寸分違わず同じことだろう。

――――願わくばボスの攻撃パターンもテスター時代と同じであってほしい

心からそう祈りたい。と言うかそうでなくては困る。

不測の事態というものは何事にも付き物だ。例え九十九パーセント成功する手術だとしても何らかの思いもよらないトラブルが発生して、失敗するってのはよくある話だ。なにせ、この世に絶対など存在しないのだから。

だが、今回に限っては絶対にソレはあってはならない。もしもそんなことが起こってでも見れば確実に隊は崩れ、場は混乱に満ちるだろう。

最悪撤退、もっと最悪な場合何人か死ぬかもしれない。

そうなれば――――。

思考の途中でぼっ、と言うような音が聞こえた。見れば両側の壁に飾られている松明が燃え始めている。どうやらそろそろ王様のご登場らしい。

丁度いい。気づけば普段の俺らしくもなく、妙にマイナス思考になっていた。

こんな状態では勝てる勝負も勝てる訳がない。

敗けた時の事なんか考えるな。俺はできることだけやればいい。全てが終わり、全てが始まったあの日に俺は確かにそう考えていたはずだ。

これから始まる戦いが例えどのような結末になろうとも俺がやれることはたったの一つ。

――――奥の玉座にふんぞり返っている王様をブチのめす、ためにサポートをすること

あれ？　なんかしまらないな。

疑問に思う俺を他所にディアベルが長剣を振り落とした。突撃の合図。

今までいまかいまかと待ちわびていた血気盛んな総勢四十数名の戦士たちは雄叫びを上げながら一斉に駆ける。立ち塞がるはコボルド王とその配下三匹のセンチネル。

「ウグルゥオオオオオオオオオ――――――――!!」

咆哮が轟く。二つの勢力が今、衝突する――――――。

□　　□　　□

戦いは今のところこちら側（攻略隊）が優勢を保っている。

騎士ディアベルの的確かつ、迅速な指揮能力が上手く働き戦況を有利に立ち回っていた。正直な所ここまで順調に進むとは思っても見なかったが、何も起こらないのであればそれに越したことはない。

後はこの調子で死亡者無しで事が済むのを願うしかない。

「シンジ、スイッチだ！」

「ＯＫ任せろ」

今までセンチネルのタゲを取っていたキリトが後ろに下がり、入れ替わりに俺が前に出る。

迫る槍斧ハルバートを右手の剣でいなし、ありったけの力を込めて、唯一の弱点であ

る首元を切り裂いた。
途端、悲鳴がなる。センチネルのＨＰバーが二割か三割ほど減った。
それに対し、怒ったのか奴はハルバートを高い位置まで持っていき俺目掛けて振り下ろす――――。

「待ってたぜ！」

既に相手が大振りの攻撃をすることを感覚的に分かっていた俺は、一足先にソードスキルの準備を終えている。

――――薄赤く光る剣が向かってきた刃を払う

《スラッシュ》の威力に力負けしたセンチネルは仰け反りながら、三メートル近く吹き飛ばされることとなる。

「後は頼む。スイッチ」
「了解！」

後方から弾丸さらがなの勢いで飛び出した。手には光り輝く細剣レイピアが握られており、彼女はそのままスピードを落とすことなくしてセンチネルの喉元に正確に《リニアー》を突き放った。
弱点を突かれ、ただでさえ俺の攻撃で体力が消耗していたのだろう。抵抗することも叶わず、光と化して散った。

「ナイス！」
「ＧＪ」

俺が声を発したと同時にキリトもレイピア使いに賞賛の声を贈った。
それに対してレイピア使いは

「……あなた達もね」

と、短い言葉で返した。
呼吸を数拍置いたあたりから見ると、なんの略か分からなかったぽいな。

オンラインゲームを一度でもやっている人ならば一発で意味が分かる程簡単な略語なんだが、真面目にＳＡＯが初めてらしい。このご時世に珍しいことだが意味は返って来きた言葉から、大方理解できているだろうと思うし解説とかしなくても大丈夫だろう。まあ、どっちにしろそんな暇ないけどな。

「来たぞ！」

声と共に二匹目のセンチネルが目の前に現れた。

「忙しいな全く」

皮肉を漏らしながら敵の攻撃を迎え撃つ。二撃、三撃と刃を撃ち合いながら火花が散るなか、不意に視界に二人のプレイヤーが入った。

一人はキリトで、もう一人は……キバオウ？

何か話しているようだが、ここからでは少々遠すぎて声はどころか顔の表情さえも確認するのは難しい。

相手が相手だけに話の内容が気になるところだが、わざわざこの場を投げ出してまで

行くほどの意味はないし、キリトが帰ってきた時にでも聞くか。ついでに攻略戦開始前の《考えごと》についても。

「グルアアアアア!!」

「うるせえな!」

考え中に突然耳元で雄叫びを上げた《センチネル》にほとんど反射的に剣が動いた。剣を弾き、有無を言わさず弱点にオレンジ色に輝いている刃を叩き込む。そこから更に動作モーションをつなげ、連続してソードスキル撃った。実に鮮やかに放たれた連続技（コンボ）を受けた相手は先ほど同様に派手に爆散した。

「今のは少しオーバーキル、だったんじゃないかしら」

数日前、キリトが発した台詞に似た台詞が耳に届き、横を向く。

気づけば不満そうな顔をしているレイピア使いがいつの間にか隣に立っていた。

「えっ、そうか?」

「ええ、思いっきりね。それに事前の打ち合わせでは確かあなたがダウンさせて、それから私とスイッチ……だったはずよね？」

ローブの下からジト目でこちらを見つめてくる。

どうやら俺がセンチネルをダウンさせたのにも関わらず、スイッチをせずにそのまま止めを差してしまったことを不服に思っているらしい。

「あ～何と言うかすまん。次は気をつける」

「別にいいわよ。そこまで気にしてないし」

そうは言ってはいるが、これは明らかに気にしているだろうといった口調に聞こえるのはなぜだろう。

ハァ～、とため息を吐きながらもこちらに向かってくる足音を察知した。一瞬、敵かと思ったが残りのセンチネルは今頃別の隊と戦闘しているだろうからこの考えは除外。

となるとこっちに来ているのはキリトか。

「悪い、勝手に離れて」

「気にすんな。どうってことはないぜ」

ガッツポーズを取りながら答えるとキリトは「そうか」と吐き出しながら呼吸を整えていた。

その様子から見るにキバオウとの話が同様を誘うよう何かであった、と見るべきか。

推測がまとまったところで丁度キリトの息も通常に戻り、質問を投げかけようとした瞬間――――。

「ウグルゥオオオオオオオオオ――――!!」

獣人の王が吠えた。

そのあまりに威圧的な叫びに俺はハッ、と思わず振り返った。

見るとコボルド王のＨＰバーは残り一本を切っており、攻略本及びベータテスター時代の記憶通りに奴は今まで使っていた斧と盾を投げ捨てた。

今まで被されていた布を強引に剥ぎ取り、そして右の腰に差されている湾刀に手を――

――――――アレ？

イルファングが獲物に手を掛けるまでの数秒がとても長く感じている。音も聞こえない。

時間に置いてかれた、と言うよりは俺の思考が、感覚がこの短い時間にのみ通常の状態を凌駕するほどに働いていた。

偶然目に入ったといってもいい、些細な勘違いかもしれないと言う不確定なナニカ。

奴が現在進行形で掴もうとしているあの湾刀、ベータ時代と比べると少々形がおかしくはないだろうか？

確かに刀身は反っていた。今回も変わらずに。だが、果たしてあんなに細かったであろうか？　あそこまでの輝きを有していただろうか、あんなにも洗練された刃であったであろうか。

違う。俺の記憶している武器は鈍く輝く無骨な剣。決してこれではない。

それにアレは湾刀と言うよりは、《曲刀》カテゴリーというよりは。

結論が頭の中で導かれた同時に時間の流れが元に戻った。

コボルド王が剣を掴み、俺は地を蹴った。

「――――シンジ!!」

多分、同じ考えに至ったのだろう。

様々な感情を込めながらキリトは俺の名前を呼んだ。

「あれをなんとかできるのは俺かお前だけだ。なんかあったら頼む」

振り向かずに声を荒げながらも言い、俺は走るスピードを上げた。

でなければ間に合わない。いや、ひょっとしたもう手遅れになるかもしれない。

アレは……はそれほどまでに危険なのだ。この時点で決して存在してはいけない。

存在を知る者は例え元ベータテスターと言えど恐らく俺かキリトか一部のプレイヤーのみ。

現れた場所は、ここことは違う旧アインクラッドの第十層。

現時点で恐らく俺が知る中で最も最強最悪の《スキル》であり、俺が最終日にて手に入れた本当の相棒とでも言うべきものでもあるその名を――――

「ボスを囲め!」

ディアベルが周囲の隊に指示を飛ばし、数十人のプレイヤーがイルファングを中心に輪を作り逃げ場を完全に無くす。

この場面に置いてこの判断は非常に正しい。これにより行動を制限出来るだけでなく、全方向からの一斉攻撃で今までより効率良くダメージを与えることが可能になる。

事実、最後の一本のゲージは既に三割減少している。

このまま続ければ三分と経たずに大量の光の欠けらが周囲へと拡散するはずだ。

そう、通常のコボルド王ならば。

「ボスから離れろ!!　奴の武器は《曲刀》じゃない!!」

ようやく声が届く範囲にまで辿りつき、叫んだ。それに反応した何人かのプレイヤーは攻撃を中断し、こちらを振り向いたが、一人のプレイヤーは既にソードスキルの初動モーションに入っており、体を止めることができずにボスの懐へと向かって行っていた。

「くそ!　ヤベぇ!!」

思わず舌打ちをし、警告が間に合わなかったプレイヤーを助けるべく、再び駈けようとした時だった。

――――奴の顔が、コボルド王の顔がほんの一瞬笑ったように見えた

思ったが瞬間やつの剣が輝きを発し、身体を垂直に宙に浮かした。それにより一人攻撃を仕掛けたプレイヤーの斬撃を見事に空を切る。

そして空中にて武器にパワー溜めていた真紅の獣王は重力に従い落下――――

――――真下にてソードスキルの硬直による一時的な行動阻害に陥っていたプレイヤーに剣が下ろされた

同時に蓄積されたエネルギーが解き放たれ、囲んでいたプレイヤーすらも巻き込んだ。

俺はギリギリ範囲外にいたが、一歩奥に行っていたら確実にやられていた。

今の攻撃を受けた者たちは皆、体力を少なくともイエローゾーンまで減らされ、少な

いが数人は行動不能（スタン）状態になっている。

全方向攻撃で尚且つ、これほどまでの攻撃力を有しているソードスキルは俺の知る限りひとつだけ。もう、疑う余地などない。

――――これは《エクストラスキル》である《カタナ》専用ソードスキル《旋車》だ

星に願いを

ベータテスター時代に《第十層》の迷宮区までたどり着けたプレイヤーは少ない。

理由は簡単だ。強かったのだ。この層にいたモンスターはそれまで戦ってきたどの層のモンスターよりも強く、迷宮区にたどり着くことさえ困難と言わざる負えない程に。

しかし、そんな中で俺やキリトを始めとした一部のプレイヤーはボスが居る《千蛇城》へとなんとか到達することができた。が、恐らくそこから《ボスの間》に行けた奴はいないだろう。

なぜならその城には刀を扱う赤色の武者《オロチ・エリートガード》が存在していたからだ。

その強さは正に圧倒的だった。今まで見たこともない変幻自在の斬撃に成す術なく、俺達は幾度となく散っていった。

だが、毎度ただやられていたわけではない。奴らのソードスキルを敢えて受ける事で技名、軌道、発動時間、硬直時間を徹底的に記録した。

この努力のお陰でなんとか赤武者と対等に、とはいかなかったものの中々いい勝負を

繰り広げることが出来たハズ……だと思いたい。

まあ、そんなこともやったが結局突破はできずにせめて何かレアアイテムでもと思い、こそこそ隠れながら宝箱を開けまくっていると一本の《剣》が俺の目に止まった。

表示されたその剣のカテゴリーは驚くことに《カタナ》だった。咄嗟に《メニューウィンドウ》を開き、《武器カテゴリー》の一覧を見た。

当初、プレイヤーの使える武器の中に《カタナ》等なかったはずなのだ。もちろんスキルにも存在しなかった。

だが在った。確かになかったはずなのだがちゃんと記述されていたのだ。スキルにも変化があった。《曲刀》のスキルから分岐で《刀匠》というスキルが出現していた。

そう、それこそがカタナを振るうための技術《エクストラスキル・カタナ》だったのだ。

この事実は比較的親しかったキリトやアルゴですら知らない。入手した直後に俺はどこぞやのダンジョンに篭もりっきりとなり、できるだけ多くのスキルを会得するために躍起になっていた。

結果、少なくとも第十層で発見された分のスキルは扱えるようになったが、直後にβテスター期間は終わりを迎えた。

□　　□　　□

□

現時点で俺が記憶している《カタナ》についての情報を脳から引っ張り出し、迅速かつ冷静に状況を判断すべく場の全体を見渡す。

まず、コボルド王を囲んでいた部隊はほとんど壊滅的だろう。死亡者はいないが、すぐに立ち上がれそうなのはいない。しかもその中のごく僅かは行動不能状態で完全に動きを封じられている。

他の部隊も動揺していて、すぐに駆けつけられるのはいない。キリトやレイピア使い達も場所が遠い。

つまりこの場で唯一動けるのは俺しかいない。

「ウグルォオ!!」

イルファングが吠えた。《旋車》後の硬直が終了し、先ほどとは違う新しい初期動作を取りながら前方の獲物に目を付けた。

視線に入っているのは今しがた大技を喰らわされた者たちの中でも一番ダメージを受けたプレイヤー。《旋車》を衝撃波ではなく、直撃してしまった――――アレは、ディ

アベルか!?

「うっ……ぐ……」

必死に立ち上がろうとしているが、すぐに膝が崩れてしまっている。

無理は無い。ＳＡＯには痛みを感じられるシステムこそ無いものの、衝撃やそれ相応の不快感は感じられるようになっている。今のディアベルの状態ならば、全身が麻痺しているような感覚に陥っているはずだ。

「ッ……不味い！」

剣を強く握り、走り出す。

コボルド王の次に繰り出される技は多分《浮船》。威力こそ少ないが、そこから繋げて放たれる《緋扇》を喰らえば命の保証はない。

しかも対象のディアベルは動きを大幅に制限され、躱す事もましてやソードスキルで攻撃を相殺することさえ叶わない。つまり詰みの状態に近い。

「間に合わないか……」

奴との距離はそう離れてはいないものの《浮船》の発動時間は短い。このまま行けばたどり着く前に、ディアベルは凶刃に掛かって命を落とすこととなるだろう。

かと言ってこれ以上スピードを速めるのも無理だ。既に俊敏度をフルに使っているため、俺自身がこれ以上速くはなれない。

ならば方法は一つだけ――――。

握っている剣を右肩に担ぐように構える。すると剣は光を灯し、直後に世界は加速した。

《ソードスキル》と通常攻撃の違いは何も威力だけではない。発動しているその一瞬だけ、本来のプレイヤーのパラメーターを凌駕する動きが可能なのだ。

今の俺の速度は、現時点で出せる速さの限界を超えている。

――――だが、それでも

間に合うかどうかは分からない。

仮に間に合ったとしても、攻撃のタイミングがズレていたら終わりだ。《浮船》の威力

を相殺できずに、或いは俺も巻き添えを喰らう。
だからと言ってこれ以上何もすることは出来ない――――――。

「う……おおおおおッ!!」

叫んだ。人間は声を出しながら何かをすることによって、本来よりも力を引き出すことが可能だという話をどこかで聞いたことがある。
その理論が《仮想世界》でも通用するかどうかは知らない。
しかし、今はそんな不確かなものでも信じるしかない。

「ウグルオオオオオオ!!」

イルファングの薄赤く光る剣がついに動き出した。
地面すれすれを走らせながら刃はディアベルに向かっていく。
それと同じくしてようやく俺もディアベルの横を通過、剣が届く位置に着くことができた。

――――――間に合った

内心ホッとしながら、すぐに気を引き締める。ここからが本番なのだ。

切り上げられる野太刀に対し、俺は剣を振り下ろした。

途端、けたたましい金属音が鳴り響く。あまりの衝撃の大きさに俺と奴は互いに二、三メートル後退することとなった。

「ディアベル！　ここは下がって態勢を立て直せ!!　コイツの相手は俺がしばらく引き受ける」

「なっ！　無茶だ、そいつは一人で戦える相手じゃない」

「馬鹿やろう!!　そんなこと言ってる場合じゃないだろーが」

一人で戦おうとする俺の身を案じているのか、一向にディアベルは下がろうとしない。

言い争っている内に次なる攻撃を放つべくコボルド王が迫る。

左腰の位置に剣を置き、刀身は緑に染まりつつある。

「《辻風》か。厄介な技ばかり出しやがって」

居合系であるあのソードスキルは発動されてからでは速すぎて、対処ができない。
ならばと相手に技を出されるより先に《スラッシュ》を発動する。
当然当たるべき目標がないため剣は空を切っていく――――。
が、急に手応えが重くなり体がまたも後ろに持って行かれそうになるが、今度はギリギリ踏ん張ることができた。

「早く行け!!　いつまで持つか分からない!」

「――――クッ!　C隊、一時撤退だ!!　動けない者には肩を貸して、ここから離れるぞ」

ようやく決断してくたのか、ディアベルは後退の指示を飛ばした。
俺はボスと向き合って剣を打ち合っているので様子は見えないが、ディアベルの指揮能力は高い。恐らく一分もしない内に全員を安全圏に移動させる事ができるだろう。

「少しの間ここを頼む。すぐに部隊を集結して、助けに入る」

後ろからの聞こえる声に俺は「おう」とだけ答えて、改めて奴と向き合う。

攻略戦が始まる前はボスと戦えないことを内心残念に思っていたが、まさかこんな状況でソレが叶うハメになるとは思っても見なかった。しかも相棒の《カタナ》とも、感動の再開までしてしまった。

全く、俺は運がいいのか悪いのか。

そんなことを考えていると青紫色の刃が俺の首を狙うべく斜めに振るわれる。

《幻月》。上下左右ランダムの斬撃を二回放つトリッキーで尚且つ終了後の硬直時間が短い優秀なソードスキルの一つだ。

それに対して俺は一撃目は膝を折って躱し、二撃目はジャンプして刀身に着地して、その上を走る。

「喰らえ！」

血のように赤く染まり上がった剣を顔面に叩きつけた。

渾身の一撃だったが、当然とでも言うべきか。ゲージはほんの僅かに減っただけで、イルファング自体は微動だにしていない。

それどころか右手で目障りなハエを殺すかのような動きで叩き落とそうとしてきた。

「マジかよ……！」

ほとんど本能的に身体を翻してなんとか直撃は避けたものの、このままでは命がいくつあっても足りはしない。

やはり一人でボス様と戦うのは無茶がすぎた。

――こんなことになるんだったら、さっきカッコつけずにキリトにも来てもらうべきだったか

今頃になって後悔の念が出てきたが今となってはもうどうにもならない。

降り止むことのない脅威を払うべく、援軍が来るまでの足止めをするべく俺は構えた。

再び剣を交えるその瞬間――――。

後ろから二つの影が飛び出した。影の一つは凶刃は弾き、もう一方は手に持つ美しい細剣で敵の腹を貫いた。

援軍が来るにはまだ早いはず、と思ったが影の姿をよく見るとカーソルが表示され、その正体が分かり納得した。

「もうちょい速く来てくれても良かったんじゃねーか。キリト」
「一人で突っ走ってたのはどこのどいつだよ」
「さあな。俺は過去は振り返らない派だから」
「……おフロ」
「グハァ！　貴様、それは卑怯だぞ!!」
「はいはい。今はそれぐらいにしときなさい。ボスの目の前で何言い争ってんのよあなた達？」

聞き覚えのある冷ややかな声。
振り向くと、そこには灰色のケープを脱いだ栗色のロングヘアの女神とでも言うべき美貌の少女――――

「あっ。あと、あなた達この戦い終わったら腐ったミルク樽一個分飲んでもらうからそのつもりで」
訂正。悪魔だ。
俺とキリトは引きずった顔をしながら半ば逃げるようにボスのもとへ同時に走った。

迫り来る無数の斬撃を捌きながら、アスナが攻撃を的確にクリティカルヒットさせていく。

だが、それでも尚獣人の王は止まらない。

戦況は確実に有利に動いているが、やはりアタッカーメイン三人の内二人が壁で、一人が攻撃では効率が悪いと言わざるを負えない。

が、その問題もすぐに解決することとなる。

「ぬぉおおおおお!!」

チョコレート色の巨人が手に持つ斧で強引にもイルファングをノックバックさせて間に割り込んできた。

それに続いてきたのか、他五名程の重装備プレイヤーもそこに並んだ。

「遅れて悪かったな。ここから先の壁役は俺たちに任せろ!!」

エギル等、壁部隊が援軍に駆けつけてきてくれたお陰でそこからの戦いは正に圧倒的だった。

イルファングの攻撃は全て防がれ、スキあらばアタッカー三人最大火力を浴びせる。
さらにディアベル率いるC隊も戦線に復帰。センチネルと戦っていた部隊も続々と参戦していった。
多勢に無勢。獣人の王のHPは一気に減らされていった。
しかし、相手もそれで終わるほど甘くは無かった。
部隊が集まった事により《囲まれた》と認識し、巨体を再び宙に浮かせるため足に力を溜めている。

「みんな退け！　ヤバイのが来るぞ!!」

自らが受けたからこそ学習したのだろう。ディアベルは《旋車》が発動することは瞬時に察知し、後退を指示した。
それに反応した全てのプレイヤーは後ろに飛び退こうとしている。
正しい判断だ。これならば多少なりとも攻撃が数人には当たるだろうが、残ったプレイヤーで十分に止めを刺すことは可能だ。
だけどな――――

「いいやディアベルさん。その必要はないぜ！」
「……えっ」
怪訝そうな顔をしてディアベルがこちらを向くが、構わずにボスの元へと向かう。
「な、やめろシンジ君!!」
呼び止める声が聞こえる。
自分でも今の行動は身勝手な行為だと思うが、今回だけはどうにか完全勝利で終わらせたいのだ。例え後で咎められようとも。
イルファングはついに垂直へと飛び上がった。そして空中で刃に赤いエネルギー溜め、徐々に地面へと近づいていく。
それに合わせて跳んだ。上がる俺と落ちるイルファング。
すれ違いざまに俺は紅色に染まった剣で奴の腹を切り裂いた。
範囲技《デス・クリープ》。跳びながら剣を振り下ろす攻撃なので飛んでいる敵相手に有効な技だ。

「ウグルォオ!?」

態勢を崩したイルファングは背中から地面へと落ちた。

その後、立ち上がろうと手足をブンブン振り回すが立ち上がれそうな状態ではない。なぜなら奴は状態異常とはまた違うバッドステータス転倒（タンブル）状態になっている。効果は、行動不能状態とだいたい同じだ。つまり――――。

「今だ！　一斉攻撃で仕留めるぞ!!」

ディアベルの叫びに、全プレイヤーがモーションを起こした。

赤、蒼、緑、紫。無数の光が部屋を満たし、直後イルファングへと降り注いでいく。

空中に居たため、一斉攻撃に参加出来なかった俺は着地した後その光景をただ観ていた。いや、違う。何故か魅入っていた。

この光に埋め尽くされた世界を現実世界のどこかで――――。

――――そうか、流星群か

先刻、アスナと初めて出会ったあの迷宮区で俺は子供の頃の思い出を思い出した。あの話には実は続きが在るのだ。

流れ星を見るために夜遅くまで起きていたと母が父に話したらしく、「それなら今年は実家に帰って星を見に行こう」ということになった。

そうして父方の家に行き、夜に空を見上げると埼玉ではとても見られないほどの光が散りばめられていた。

幻想的な風景だった。もうそれだけで気持ちは満足してしまうほどに。

だけど、それだけで終わらなかった。その日は丁度流星群が通過する日だったのだ。

凄かった。言葉になんか言い表せないほど綺麗で他のことなんか考えられなくなった。

今の光景はその時と似ている。

彼らが持っている剣一つ一つが流れる星であり、いつ消えて(死んで)しまうか分からないプレイヤー達自身を暗示しているかのように感じられた。

だが、同時に希望を感じた。

確かに流れ星とはどこにたどり着くこともなく、一時の生命を燃やし尽くすかのように消えてしまう。だが、一方で消えないものもある。

それはきっと人の願いと一緒なんだろう。多くは脆く儚く叶うことはないが、それで

もほんの少しではあるが報われることがあるのだ。
だからきっと大丈夫だろう。なんて言ったてこれだけの星があるのだ。だったらこの世界にいる全プレイヤーの願いはきっと叶うはずだ。

「ウグルオオオオオオオオオ――――――」

最後に雄叫び上げて《イルファング・ザ・コボルドロード》は姿を光へと変えて姿を消した。

第一層攻略戦　完全勝利にて集結　我らの道は希望の道なり

その日、号外にてこの結果は第一層全域へと広まる事となる。

攻略の代償

このフロアを支配していたコボルド王が消滅し、それと同時に配下のセンチネルもこの場から完全に消え失せた。

部屋もそれとなく明るくなり、場の雰囲気も先ほどまでの重苦しいのとはまた違ったものに変わっている気がする。

しかしそれにも関わらず、誰も勝利の歓声を挙げようとするものはいなかった。それどころか一人として身に持つ武器を収めようとせず、未だ戦いは終わっていないと言わんばかりの雰囲気だった。

キリトやレイピア使い、そしてディアベルでさえもその場で硬直状態のまま呆然としている。かく言う俺も剣を収めずにいた。

戦いは終わった。

頭ではそう理解しているのに身体は今も尚、新たな脅威を恐れて臨戦態勢を解こうとはしない。いや、ここは仮想世界だから多分頭でも理解できていないのだろう。

結局のところ、まだ俺達は勝てていないのだ。この場が《恐怖》に支配されている限り、それを勝利と呼ぶことはできない。

そう考えるとなんかイラッとしてきた。既に勝敗は決しているのに、これではまるでこっちが負けたみたいだ。

そうじゃないだろ。βテスト版の頃はボスに勝利する度にそこら中から歓声が上がっていたのだ。今は確かにデスゲームになってしまったが、それは今だって変わっていないはずだ。

俺は剣を地面に突き刺し、腹一杯に息を吸って――――

「よっしゃあああああ!!」

拳を空に掲げて、高らかに叫んだ。

静寂を破るときは誰かが一声上げるだけで済むのだが、その一歩を踏み出そうとするのには中々度胸がいる。よって、漢気を見せた俺に対して帰ってくるのは同じく喜びの叫び声――――。

ではなく――――冷たい視線でした。

正確に言うと「いきなりどうしたコイツ？」と言うような眼で此方を見ているのだ。

……いや、まあ確かにいきなり声を上げましたけど、こういう時って体外ノリに乗ってくれますよね。確かに俺なんかより、騎士様の方が良いんでしょうですけど、そこはなんか色々と補正掛けてくれっていいじゃないかな。

「……ぷふっ！」

どこかで吹き出した声が聞こえた。
そこからしばらくは声を抑えているのか、音は少しずつ小さくなっていくが、やがて持ちこたえられなくなったのか、爆発したかのように笑い声を上げた。
それを皮切りに一人、二人と緊張の紐がほどけたかのように声を上げていく。
あ、あれ～？　これは結果オーライってことでいいの？　確かに静寂は破ったけど、何かが違うような気もするような。
――まあ、いいか。
何やともあれこれでようやく《勝利》できたのだ。
例えそれが俺の心を軽く傷つけた事になったとしても、さっきみたいなジメジメした暗い雰囲気よりは随分とマシだ、と心の中で無理やり納得しましたよ。
ため息を軽く吐き、突き刺した剣を引っこ抜いて鞘に収める。
その後頭を掻きながら俺はキリトとレイピア使いのもとへと真っ直ぐに向かった。
「お疲れ」
向かってくる俺にキリトは労いの言葉と、右手を上げるアクションを起こした。
それにほとんど反射的に俺も右手を上げて、
「おう、お疲れさん」
パァン、といい音を響かせながらハイタッチは交わされた。

さっきの《歓声》が勝利を表すというならばこの《ハイタッチ》は終わったのだと実感させてくれる。
「お疲れ様」
「おう、お疲……」

続いてレイピア使いも手を挙げたので、同じく手を上げて――――ん？
あれ、もしや彼女は俺とハイタッチをしてくれようとしているのだろうか？
突然の疑問に、行おうとした動作は途中で硬直され、俺はあ然とレイピア使いの方を見ていた。
「……どうしたのよ、いきなり固まって」
「いや、何つうか。……俺とハイタッチしてくれるの？」
俺から見るレイピア使いという女子はなんと言うか、そういうことはやらない人だと思ってた。何せ、いかにも気高きお嬢様って感じだったからこういう体育会系ぽいのをやるイメージが湧かない。どちらかといえばお風呂の女神さまってイメージが――――。
「……何かまた変なこと考えてるでしょう？　」
「へ？　ハハハッ、そんなこと無いっすよ」

レイピア使いの鋭い視線に即座に気づき、何とかごまかす事ができた。
しかし、イメージとして俺の中でそう根付いてしまっているので今更どうこうできる気はしはない。健全な中二男子にはあまりにもインパクト強すぎたのだ。
よってどこかの某ゲームキャラの言葉を借りるなら「俺は悪くねぇ！」。
「はあー、何であなたたちは私にそう言うイメージしかもってないのよ」
「と、言いますともしかして」

呆れ顔でレイピア使いが指差す方に居たのは予想通りキリトだった。
若干苦笑いしているところから察するに、やはり奴も俺と同じような事を言ったに違いない。間違いなく俺と同じ反応をしたんだろう。もしくはコミュニケーションの熟練度が俺よりも低いからもっと酷かったか。
「ところで……やっぱり変なこと考えてたじゃない」
「あっ」
しまった。いつの間にか彼女の術中に嵌っていたということか。おのれ、やりおる。
そんな負け惜しみにも似た俺の思考をも読み取られたのか。
一息吐き出すと、彼女は再び手を上げた。
「改めてお疲れ様」

「オッス、お疲れ」
ようやく互いの手を打ち合い、パーティー内での労いを終えると同時に、こちらに一つの人影が近づいてきた。
両手斧を扱うチョコ色の巨人エギル。脳内で何故かそう変換してしまい思わず笑いそうになったが、流石に失礼極まりないのでコホンと咳払いをしてから向き合った。
「……見事な連携だったぞ。君たちのお陰で今日の攻略戦は誰も死なずに済んだ。ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ、この勝利は誰のものでもない。君たちのものだ」
そう言ってエギルはその太くたくましい腕を持ち上げて、拳を握った。
外見からの威圧感がとてつもなく、攻略会議の時では恐ろしい程の咆哮を上げた――
――これはまあ、俺のせいでもある――――彼だが、本当は凄くいい人なんだろうな……多分。
そんな人を怒らせてしまうようなことをしてしまった事に少しばかり反省し、今だ誰も拳を合わせていないので、ならば最初の一発は俺から行こうと拳を固めた時だった。
「――――ふざけるなよ!!」
突然誰かの叫び声が響き渡り、この場は再び静寂に包まれた。
一体誰が出した声だったのか。その声の主が見つかるのはそう遅くはなかった。
叫びを近くで聞いていた者は突然の声に驚き、目を見開きながら《その人》を見つめ

ていた。それが周りに伝染して自然に声の発生源へと向けられていく。
発言者は俺と同じ《曲刀カテゴリー》のシミッター使い。前半ではボスと主に戦闘を繰り広げていたチーム、つまりそれはディアベルの隊であるということだ。
しかし様子がおかしい
「リ、リンド？　いきなりどうしたんだ？」
その隊のリーダーたるディアベルは現状をまるで把握していない。むしろ、彼自身が一番驚いているようにリンドと呼ばれるシミッター使いを見つめている。
そして問題のプレイヤーであるリンドの視線は此方に向けられていた。表情は《怒り》、か？
「――なんでみんな何も言わないんだ？　そいつ等はボスの使う技を知っていたんだぞ？　そいつらがそもそも俺たちにボスの情報を流していれば、ディアベルさんやみんなは死にかけることなんかなかったんだぞ!?」
息を切らしながら叫ぶリンドの言葉は、プレイヤー達の波紋を呼ぶには十分だった。
そこらかしこから声が聞こえる。話題はどれも同じで、話し合っているのは一つの疑問について。
――なぜ、攻略本にも書かれていなかったボスの技を知っていたのか？
思えば飛び出す前から気づくべきだった。

元βテスターでさえ存在を知る者は限られているというのに。現時点に置いてほとんどのプレイヤーにとって未知の存在である《カタナスキル》を相手取るということは一体何を意味するのか。

自分で言うのも何だが、気づいていてもディアベルは助けたと思う。しかし、戦い方についてはせめて工夫をするべきだったのではないのだろうか。気の利いた言い訳の一つや二つぐらい考えられたのではないのか。

何より彼――――リンドは《そいつ等》と言った。その言葉が意味しているのは……

「お、俺は分かったぞ！　こいつ等……元βテスターだ!!　みんながボスの攻撃にやられている隙にオイシイ所だけ持ってこうとしたんだ!!　きっと他にも何か隠してるぞ!!」

誰かが言ったその推測とも呼べぬ発言はしかし、俺には否定できなかった。

もちろん我先にボスに止めを差そうとか、何かを隠そうとか考えていたわけでもない。割合にして九割はハズレだ。

だが、残りの一割である《元βテスター》だということだけは事実なのだ。

安易に否定の言葉を述べようものならば、その後に待っている追求を逃れる術はない。

何よりこの状況、さっきから彼らは俺個人にではなく複数人に対して発言している。

つまり疑いの対象は既にキリト、最悪レイピア使いにまで及んでいるということになる。

「ほら見ろ！　何も言い返せないってことはそれが真実――――――」

「いい加減にしないか!!」

怒声が言葉を遮った。

反論の声を上げたのは意外にもディアベルだった。

「彼らはオレ達を助けてくれたんだぞ!?　命の恩人にそれはないだろう!!」

大部隊を指揮する彼は常に中立に立っていなければいけないのに、それを破ってまでこちら側を庇護しようとしてくれている。それに続いて何人かもこちら側を庇うようなことを発言を申しだしてくれた。

しかし、もう一方の方ではそれに対立するように言葉を飛ばし、気づけばレイドパーティーは半分に割れていた。

――――――これは、やばい

ディアベルや他のプレイヤー達が庇おうとしてくれているのは素直に嬉しい。

しかしだ。その結果、攻略隊は分裂寸前の所まで来てしまっている。このまま続けば遅かれ早かれ隊は分裂し、埋められない溝ができてしまう。

それだけは絶対に阻止しなくてはいけない。無論、キリトやレイピア使いがβテス

ターとして烙印を押されることも阻止しなければいけない。
今回の責任は後先考えずに動いた俺だけが取るべきなのだ。
荒くなる息を整えろ。攻略会議の時を思い出せ。
俺が出ていくことで現状がどう転ぶかは全く想像できないが、少なくとも今よりは現状を良くしてみせる。
拳を握り締め、俺は一歩を踏み出し――――
――――えっ？
誰かに手を掴まれて、後ろへと引っ張られた。
代わりに俺の横を一人の見知った少年が通り過ぎていった。
「き、キリト？」
思わず名を読んでしまったが、キリトは振り向くどころか無反応で歩き続けた。
一体アイツはどこに行くつもりなのか？　俺はアイツの突然の行動に理解が追いつかず思考が二、三秒停止し――――アイツがフロアの中央に着いた時にようやく悟った。
瞬間、すぐさまキリトの元へと駆けようと足を動かした。
予想通りなら、いや間違いなくキリトはやる。だったら口を開く前に止めなくては。
それは俺の責任で、役目なのだ。お前が被る必要はない。

様々な感情が脳内を巡り、またしても行動は阻まれた。
右腕を両手でガッシリ掴まれている。振りほどこうにも、解くことができなかった。
「放せよ!!」
無駄だと分かっていながら抵抗を続けたが、ふと目に入ったレイピア使いの眼。そして静かに左右に首を振る仕草を見た途端、身体から力が抜けた。
そして――――
「さっきから聞いてりゃあ、笑わしてくれるぜ」
俺を含むこの場に居た全プレイヤーは一人の少年に視線を移した
「元ベータテスターだって？　あんな素人連中と一緒にしないでもらいたいな」
発せられた声はとても無感情で、表情はふてぶてしかった。